

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第144号・12周年記念号（2018年5月）

風に吹かれて（121）

白井啓治

・春の陽だまりに蜥蜴びよんと跳ねる

次々ページをめくるように季節が移ろい過ぎて行くのが日本の愉快なところだと思っていたのに、この春は頁を捲った途端、見開きの中に全部の花の散りゆくさまが乱雑に描かれていた。春の長閑な愉快さはなかった。日々の移ろいを知らせてくれる花々の隙間を縫うように、花冷えの風が流れる愉快の见えない季節の中に放り込まれると、人生の終焉を無理矢理愉しめと押し付けられた気がする。そんなに押し付けてくれなくても、マイペースに日の移ろいを愉しむから、と声にしてみるもこの春の愉しみ方なのかもしれない。

そんな小生に同調してくれたのか、庭の蜥蜴の一匹が、何かのきっかけで覚えたのか、体をまげてぴよんと飛び跳ね、楽しげに遊んでいるのを目にして思わず拍手を送る。

『ふるさと風、十二周年を迎えて』

当会報、ふるさと風も今回で144号となり、干支の一回り、満十二周年となった。ふるさと風の会と一緒に立ち上げた打田升三、兼平智恵子、小林

幸枝さんには、1号も欠けることなく144号を書き続けて来た。その情熱と努力はただただ敬服するばかりである。

第2号から参加の伊東弓子さん、19号からの菅原茂美さん、79号からの木村進さん、123号からの木下明男さん、入会された皆さんには、毎号休むことなく自分の思いを伝えるべく原稿を書き続けて頂いている。そして、今回から新しく入会した、地元石岡出身者である菊池孝夫さんにも継続した執筆を願うものである。

これまで何度か紹介してきたが、ふるさと風の会は、2006年6月に、2004年6月に始まった町おこし活動、ふるさとルネサンス事業の一つであった「民話ルネサンス講座」の第一期受講生と立ち上げたものである。

講座には、十数名の受講者がいたが、第一期生で最後まで残ったのは、打田升三さんと兼平智恵子さんの二名であった。講座の講師を引き受けた時から、座学をするつもりはなかったの、自分で題材を見つけて物語をルネサンス出来る人がそれ程育つとは考えていなかった。少数でいいからと思っただけだったが、最後まで受講したのが二名であったことには、正直さみしい思いであった。

しかし、脚本家仲間から「そんな田舎の教室で

二名も卒業なんて出来過ぎだぞ」と言われたのであった。よくよく冷静に考えれば、延べにして十数名の受講生の中から二名も最後まで残るとするのは驚愕というべきであろう。しかも座学講義ではなく、自ら題材を探し、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造をしていくのであるから、二名残ったというのは、ルネサンス事業としては出来過ぎというべきであろう。

特に打田升三さんは、ルネサンス事業へのきっかけを作った人であったことから、特別厳しくというわけではなかったが、随分と原稿のダメ出しをして書き直しを強いてしまった。しかし、その所為ではないが、打田さんの創作意欲には脱帽である。

ふるさと石岡を基点にして、随分と多数の作品を創出してもらった。ふるさとに物語を降らせる市民プロを、という講座開設にあたって小生の思い描いた姿を実現してもらえたことは、指導者冥利に尽きるものである。十二周年を記念して、打田升三さんの代表的作品を紹介してみたい。

- ・茨城の里
- ・才媛の時代
- ・征服の大義
- ・戦乱
- ・天蚕天馬・絹の道
- ・興亡の連鎖
- ・国分寺余話
- ・虚構と真実の谷間
- ・私本平家物語
- ・私本将門記

そして現在では、私本太平記に挑戦されている。兼平智恵子さんは、ライフワークとしているふるさと歴史のご案内を、絵と文にした「歴史の里

いしおかめぐり」を完成し、多くの方々に読まれている。

会員の皆さんの作品は、風の文庫として手作りの小冊子を作成し、石岡市まちかど情報センター他にて販売させていただいている。

小林幸枝さんは、打田さん、兼平さんから一年遅れで、朗読教室の方へ手話朗読の出来る人をとの募集に来られたのであった。聾者である小林さんと、最初に面接した時に、小生の知る手話の概念から飛び出した、舞台映えしたスケール感のある手話動作に驚き、大変な人材に巡り合ったものだ、「明日からいらっしゃい」と教室を離れて内弟子として迎えたのであった。そして、世界初の朗読を主旋律とした手話舞を完成させたのである。ふるさと風の会(スタートはふるさとルネサンスの会に

半年遅れてふるさと風の会の兄妹として手話舞を軸にした劇団ことば座を立ち上げ、常世の国の恋物語百への挑戦をスタートさせたのであった。石岡生まれの手話舞は、NHK水戸の取材番組にも紹介されている。

ことば座の舞台は、小林さんの演じる手話舞と兼平智恵子さんの描く「常世の国の五百相」を背景に演じられる新しいふる里の文化資産であると自負するものである。東京のシアターカイでの公演においても、小林の演じる手話舞と舞台装飾としての五百相は高い評価をいただいた。

昨年(2017年)より、ことば座をふるさと風の会に統合し、ふるさと風劇団・ことば座とし、昨年までに三十七話まで進んだ百物語を継続し、今年は十二年祭として第三十八話「龍(Ryu)」を公演する予定である。

当会報「ふるさと風」が十二周年・通巻144号を

迎えることが出来たのは、多くの読者の支えがあったからであり、加えてふるさと運動の先達者の方達の暖かい助言や後押しを頂いたことにあると言える。

中でも旧八郷町の時代に、「遊」というふる里誌を十年にわたって発行されてきた合田寅彦兄、そして合田兄の紹介で面識を得、その後深い交流を頂いている美浦村の元村長市川紀行兄には大きな力を頂いた。

また縄文語の研究をされ、多くの著書を出されている鈴木健兄にも大きな後押しを頂いた。さらにことば座の小林幸枝の手話舞に音声言語の深層心理を表現する舞と評してくださった元東日本国際大学学長・吉野公喜兄にも過大な応援歌を頂いた。

会報を「ふるさと風」に改称して間もなくの頃、合田兄より一度皆さんとお出でくださいとお誘いを受けた。その時に「出る杭は打たれるけれど、うんと高い杭を立てれば打たれることはないの、うんと高い杭を」とお話を頂き、以後出来るだけ高い杭を立ててやろうと決めたことを今でもよく思い出す。

高い杭を立て咆哮する、の風の会の風土を菅原茂美兄は、自分の専門分野を通して、こんなこと書いても大丈夫ですかと言いながら、「文句あるか!」とばかりに入会以来125号連続して咆哮ておられる。見上げたもんだよ屋根屋の禪、である。

伊東弓子さんも、玉里御留川を歩く会を続けながら、控えめな「文句あるか」を呟いている。

木村進さんは、本会報の「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」に真正面に取り組み、埋もれた歴史を掘り起こし、紹介してくれている。

ことば座の「常世の国の恋物語百」を初演時か

ら強力に後押ししてくれた木下明男さんは、労音の創成期の記録を残しておきたいと、古い資料をめくりながら書いておられる。

「ふるさととは何か」と問われれば、私は「ふる里とは物語の降る里」と即答する。そしてそこに「恋の降る里」と併記する。暮らしとしての物語の降らない里は亡びゆくだけ。そして、恋の降らない里には、次代を継ぐ若者たちが集うことはない。物語の、そして恋の降らない里はただ亡びゆくのみである。

歴史とは、事実を記録したもののことを言う。この石岡を歴史の里と言うのであれば、自分たちの国(ふる里)の事実を検証・記録して、歴史認識の里ではなく歴史の里に戻して自慢することが真に求められていることであろう。

緩やかな流れの時代を断ち切って誕生した明治と言う時の都合によって構築された嘘を「伝統」と言うのをそろそろ止めなければならぬ。

民話ルネサンス講座にはじまった「ふるさと風の会」であるが、伝承されていく民話とは、そこに暮らしの道標が内在しているからだと言うことが出来る。道標の内在していない物語には、伝承する意義はなく、振り向かれることもなく消滅するのみである。民話とは、昔を懐かしむための物語ではなく、今を語る物語でなければ存在する意味がない。その意味からも伝承民話が語られないというのは、今がないということでもある。

今、ふるさと風の会には民話ルネサンスと言う縛りはない。暮らしのあらゆる側面において物語の、恋の降る里となるべく見上げてもてっぺんの見えない程の高さの杭を何本も立て大いなる声の叫びたいと考えている。

後期高齢者は昨日のことも忘れるから誤りがあ
るかも知れないが、平成十五年の秋に石岡市制五
十周年記念行事が行われ石岡市文化協会が記念誌
発行などの事業を行なった。当時、既に現役を退
いていた私は其の行事に首を突っ込むことになり
何かの催しで「：頼まれて代わりに来た：」とい
う白井啓治氏を知ったのである。

其の頃は（現在も変わらないかも知れないが）何処の都
市でも、中心部市街地の衰退が顕著であり商工会
議所などが何とかしなければ！と苦慮していたよ
うなので、余計なことかも知れないが私は「：石
岡にもこう言うプロの脚本家・演出家が居る：」
という話を「まちかど情報センター」にしたとこ
ろ、其の話に火が点いてしまい、商工会議所が主
催する「ふるさとルネサンスによるまちづくり」
が企画され、具体的活動の第一弾として白井啓治
先生を講師とする「石岡近辺の民話を発掘し伝承
して行く民話ルネサンス」が実行されることにな
ってしまった。（申し訳ない！）

此の計画は、言い換えるとプロの文章を目指す
講座により市民作家を育成し郷土に新しい物語を
広めて行く：という活動であり、平成十六年六月
には狭い会場で盛大な開講式が行われた。

受講生は兼平智恵子さんと私と他に数名ほど居
たが直ぐに居なくなり、数か月後に伊藤由美子さ
んが来た。（私も逃げれば良かったのだが：）その
厳しい講座に？打ち勝つて無事に卒業した者が何
か頑張った証拠を残そう：と思い付いたのが「会
報の発行」であり、最初は「ふるさとルネサンス
の会会報」として月刊で第二号まで出してから「ふ
るさとルネサンス」に変えて、二〇〇七年四月の

第十一号からは「ふるさと風」と改称し、其れが
現在に至っている。

時折は会員以外からの投稿も有ったが、変わら
ぬ五人のメンバーで頑張っていたところ、第十九
号（二〇〇七年十一月）から菅原茂美さんが参加して
くれた。会報の発行は欠かさず続けたのだが、其の
うちに会の拠点としていた仲町の旧久松商店が閉
店となり「：風の会」は文字どおり中空に浮いて
しまい、当時、泉町に開店していた「いしおか補
聴器」の阿部さんや、ギター文化館の木下明男館
長（当時）に面倒を見て頂き、毎号、欠かさずに発
行を続ける事が出来た。一方で「捨てる神あれば
拾う神あり」と言う諺があるように平成二十四年
頃からは木村進さんが会友として協力して下さる
様になり、現在のは会の主要メンバーとして作業場
から印刷まで協力提供して頂いているので正に
「会の救世主」である。其の後、木下さんも参加
され、更に何年ぶりかで新たな入会希望者（菊地
孝夫さん）が出現して人的にも充実してきた。
人類はそれぞれに言葉を持つているがなぜか、
其れを文章にする：となると躊躇する。其の原因
は「文章が特別なもの」と考えているからではな
いか：と私は思う。「この様なことを書いては：」
とか「読んだ人が何か言うのでは？」とか、余計
な心配をすると、何も書けず、遂には言いたいこ
とも言えなくなる：と私は思っている。

他人の悪口は論外だが、大袈裟に言えば自分の
思考や感情、或いは感覚などを文字で表現する技
術は人間にしか無いのであるから、是を最大限に
活用することが人間として生きる証しであろう。
私も年齢相応にボケてはきたが支離滅裂ながら何
とか書ける。怪しい表現があったら指摘してくだ
さい。

ふるさと風創立12周年・第144号記念

特別寄稿

祝・「風」の12年

市川 紀行

1

「ふるさと」にどんな風が吹いたのか。物語の
降りつむ里の四季折々に紡がれたのはどんな言葉
のドラマだったか。朔風と微風、春風と秋風、春
一番と木枯らし、花吹雪と氷雨風。そして縄文の
舞から竜神の叫び、たおやかな恋と嘆きの初めて
の手話舞。歴史の里といわれる石岡に、ほんもの
の文化を生み出そうと、誰かに寄りかからない、
ここにしかないエネルギーを掘り起こそうと辛苦
12年。霞ヶ浦対岸から見てもまさにユニークな存
在であった。動かない「伝説の石岡」にあつて、
ここに人ありの矢を放つ鋭い光でもあった。考え
てもみよう、この少数だが中央でも通じる白井氏
をはじめ有識個性あふれるメンバーの存在と発信
が無かったら沈みゆく地方都市「いしおか」は訴
える何かを持ちえたかと。対岸遠く失礼を承知で
叱られるけれども、動こうとする市民の潜在力を
支え励ましたのも気づかせたのも「風」の「えい
えい」たる成果だと感じざるを得ない。どんな風
が吹いたか。数は知らず、英明たるべき市民の額
の髪を揺らし続けたのが「風」の12年であった。
それを受けてきつと動き出す市民たち、背中を押
す「風」を朔風というか春一番というか。人類学・
菅原氏は文明論的になんと呼ぶだろうか。打田氏
は歴史博学の長編からなんと呼ぶだろうか。楽し
みである。そして白井氏はきつとワンニャン3S

に聞くだらう、「ニヤンだ」と。3Sは言う「寒いのは嫌だ、ゆったり寝てから考えよう」。友よ、新しい「風」のドラマ、20年を目指して楽しもうではないか。

2

白井氏がブログで春到来のみっともない早さを随分とぼやきまくっていた。季節には順序があるのだ。花も当然順番がある。香りもそれぞれに匂わねばならない。春も夏の陽気も、花の咲くのも散るのも「一緒くた」とはなんということぞ。人生の美学に合わせぬ。

白井氏ほど歌舞音曲に風流でない私は庭の花たちの連続混合模様を堪能した。美しい花はそれとして、妖艶馥郁たる香りの舞である。少し遅れた梅と蠟梅に辛夷と姫こぶしの満開がかぶさり、散らばこそ桜に水仙、ミモザにハナミズキ。香りがやや静まると沈丁花が風に乗る。そして間をつく暇なく白い藤。剪定をさぼった濡れ縁の前の藤棚が豪勢に伸び放題の蔓を広げひしめき合つて咲き誇る。見事なものだ。桜よりも命を感じる。年老いつつあれど我が官能は美女の香りかくもありなんと両手に嗅覚あるごとく手を広げて抱きしめる。額田の君も和泉式部もかりしか。「嬌として声なき楊貴妃」も「虞や虞や汝を如何せん」の虞美人も終わり悲しければなお、妖艶の香りの似合わずとや。

これを書いている今もふじの盛りは衰えを知らない。紫藤も咲き出した。もうきつぱりと剪定はやめよう。咲くにまかせよ、三とせののちのあると思うな。

白井氏のブログも何やら逆説めいてくるから不思議だ。香りに嫉妬したに違いない。

さて、ふるさと「風」はめでたく12年、144号を迎えるが、私どもの月報「ヨイショプレス」は少し早くスタートして20年以上、275号を迎えた。美浦の国指定史跡「縄文陸平貝塚」の保存と活用を具体的に進めるために自主的に結成された市民ボランティア組織が「陸平（おかだい）をヨイショする会」である。まるで忘れ去られ見捨てられ、開発の「邪魔者」として消される運命にあつた「日本考古学の発祥地・陸平貝塚」をかけたえのない地域資源、地域特性として復活蘇生させる取り組みについてはいろいろ書いた述べてりしているのでここでは省くが、縄文遺跡の理想的完全保存の目的が立った時「ヨイショする会」は結成されたのである。行政とは連携するが基本的には自主独立運営、会費を集め予算も総会で決める。当初250名の村内外会員がいたが現在130名である。「縄文」に係る「ヨイショする会」の様々な活動の評価も相まって1998年、国は国指定史跡とした。

「邪魔者」が国の宝になったのである。「ヨイショ」の活動は土器部会、縄文食部会、里山部会、縄文太鼓とさまざまであるが、全体としても「縄文の森コンサート」、「縄文ムラまつり」、陸平を舞台・テーマとする「演劇、芸術」公演、草刈、古代米作りなどにぎやかだ。チケットを売り、自前のグッズを売り、イベントではヨイショカフェを開いて資金を稼ぐ。変な義務感がないし村の学芸員も協力的だし（村も頼りにしている）、ともかく途切れることなく続いてきた。ちなみに「縄文の森コンサート」には「ことば座・手話舞」の公演もあつた。

そしてはるばると「ヨイショする会」設立20周年を迎えた。2年前である。「陸平」の活動は今後百年、二百年と続けられるだろう。そのための

指標、道標になるにふさわしい「記念誌」をつくらうではないか。未来の「陸平」のためにいいものを残すのだ。

編集委員会をつくり、資料を整理し原稿を集め、編集校正も自前で行った。課題は出版費用である。ふるさと「風」もそうだろうが月報にしろ、パフオーマンスにしろ自前でやるのはなかなかしんどい。しかも今回の「20周年記念誌」は中身も性格も違う。ハードカバーのA4版、アルバムの写真多数のフルカラー、240ページである。そしてこれはヨイショの記録のみならず、美浦村の誇りうる発信であり、遺産となり得るべきものである。私たちは設立以来初めて村当局に助成金の要請を行った。製本印刷、600部で入札見積もり百数十万円。

私は村長として「開発と保存は並立同義」という後に「美浦方式」と呼ばれる原則を打ち出した。つまり遺跡保存が出来なければ開発整備もないということである。これは理想的に実現して進んだが、（バブル崩壊と協力企業の撤退、企業の全所有地の村への無償寄付等は省く）私が危惧したのは将来にわたつて遺跡の保存と活用に必要な費用の確保であつた。私が村長であるうちはいい、熱があるうちは、あるいは自治体に余裕があるうちはいい。しかし一般に財政が厳しくなると一番先に切られるのは教育文化にかかわるソフト事業費である。地域の精神的歴史的アイディンティティのシンボルとはいえ、遺跡の保存活用費などひとたまりもない。そういう例は全国でいやというほど見てきた。そこで私は先行してオープンするゴルフ場の運営企業セゾンとオリックスと開発原則に則り「陸平基金」徴収の契約を結んだ。素晴らしい緑の環境を一番に享受するプレイヤーから一人一回百円（結果的にプレイ

ヤー50円、企業50円を陸平のために寄せてもらうのだ。両企業とも好意的に賛同してくれた。以降20年、今も基金は続いている。時々プレイヤーが帰り道に陸平を訪れて喜んで納得してくださる。年間7万人から10万人が来られる。年間7百万円から1千万円が基金として収納される。使途は「陸平の保存と活用」に限定される。人件費やハード面は適用外である。20年以上、1億数千万円が集まり現残高7千万円があるという。これが永続するのだからいかか。お金のことからあまり話したことはないが、私の施策遺産として多少は誇れると思う。全国唯一無二、首長の発想や企画、「権力」の使用はこういうところで生かされないといけない。(おこがましくもあえていえば) 先見性と洞察の一つの結実であった。

現村長は快く私たちの要請を受けてくれ基金からの助成を認めた。本年3月、「ヨイシヨする会20周年記念誌・陸平よ はるかに」は見ごたえする立派な出版を見た。百年後の評価に十分耐えられるだろう。陸平の夢とロマンを語り続けてほしい。白井啓治氏の玉稿と手話舞、小林嬢の舞姿も当然ながらページを飾ってくれている。

3

初音

アウフヘーベン

妻に 生のなかに不死をみる

きのうは冬 それは花 たとえば水仙

きょうは春

桃の節句の三月三日 不死のなかに生をみる

なんとまあ 昭子とふたりで それは

うぐいすの初音をきいた たとえばわが孫たち

ふたりして 感性の表出のとどまるところ

淡い空の下にいて 出の感性のとどまるところ
あらと昭子が
ほらとわたしが すべては死さへ止揚されよう
何という
うれしい幸いの朝だろう

こういう日が
一日あれば
人生それでいい

詩人

ランボオに夢で会った
いまも変わらぬ砂漠の道で
車で追いかけると
海辺だった

ドライバーが振り返った
中也だった

ランボオが海にいる
指さすと

ああ あれは波さ
中也は笑った

二十歳のころ

よくふたりの夢をみた

もう五十年以上もの月日が経って
ふたりに会うこともない

いいんだ もう
なにを怖れることはない
わたしも

それなりに
いっぱいみたのだから
(元美浦村長・劇団「宙の会」主宰「陸平をヨイシヨする会」会長)

縄文の春風に乗るケーナ之音

田島早苗

「遅れてごめん」「丁度良かった、これから昼食の時間だよ」

久しぶりの陸平には、矢張り穏やかな時が流れ、『陸平をヨイシヨする会』発足二十周年記念誌の発刊を祝うコンサートを成功させたいと願う会員の熱気にあふれていた。

平素はごく一部の人達だけが頑張っているように見える陸平をヨイシヨする会だが、いざと言う時に見事な結束を見せてイベントを盛り上げ、成功に導くと言うヨイシヨする会の伝統は健在のようだ。

一病を得て不本意ながら娘の家に同居、美浦村の住人から隣の阿見町へ移動して三年半、隣町なのに交通の便が悪く、中々来られなかった陸平だったが、今回の記念コンサートは「必ずお手伝いします」と連絡して張り切っていたのに：娘の時間のやり繰りが思ったより手間取ってこの始末！皆さんのお持ち寄りの品々とお握り弁当を頂きながら、まるで出戻り娘(婆)みたいな居心地の悪さを感じていた。

平成六年の篠刈りから関わって、次の年に発足した「陸平をヨイシヨする会」の会員になり、どのイベントにも参加、土器研究部会での実績も積み上げ、気が付けば陸平は、仕事の関係で、昭和四十二年に岐阜市から移住してきた私の心の拠り

所になっていた。

当時、陸平の奉仕作業は、浮世のしがらみに関係なく集まったボランティア仲間との楽しい語らいの場でもあった。

二十年の歳月は過酷なもので、発足当時あんなにも澁瀬と輝いていた会員も老いが目立つようになり、後継者不足が頭痛のタネになって居たが、二十周年目のコンサート準備に集まり、きびきびと動き回っている、娘と同年代の人達を眺め、心配しなくてもヨイショする会は大丈夫、ロートルの出る幕はないのだと、改めて認識「其処に居て下さるだけで良いのだから」と言う労りの言葉を、虚心に受け止め、改めて皆さんお持ち寄りのご馳走を味わって食べ始めていた。

以前「陸平縄文ムラまつり」で演奏されたケーナを聞きそびれ、残念で堪らなかった想いを引きずっていた私にとって、ようやく想い人に巡り会えたと期待も一入だった。

ケーナの澄み切った音色が、超満員の文化財センターの会場から縄文大地に流れ、聴衆もケーナの音に乗って、時代旅行を楽しんで居る様だった。

陸平縄文コンサートは毎年係になった人が、選り抜いたゲストを招き、趣向を凝らした内容で、何時も、もっと多くの人に見て貰いたかったと思う程素晴らしい内容ばかり。

『ふるさと「風」』とのご縁もそんな一環の中から生まれた素晴らしい出会いだった。

二十一年二月六日、文化財センターのコンサート会場は、各種のお面や仮面、書等に彩られた一味違った空間になり、手話の会「コスモス」の仲間を誘った私はドキドキしながら手話舞の始まるのを待っていた。

市川紀行氏に誘われて行った石岡のギター文化

会館で、美浦の舞踊家小峯久美子さんと、手話舞のコラボに出会い、その素晴らしさに感動したヨイショする会の面々は、早速陸平縄文コンサートへの招致を決め、動き出したのだった。

演出兼語り部の白井啓治氏は、石岡に移住後、一貫して石岡の埋もれた歴史を掘り起こし、物語を紡ぐ活動を続け、その中で小林幸枝さんと言うたぐいまれな素質に出会い、他に類を見ない手話舞を始められたと承って居る（もし間違っていたらお許しを。）

会員の想いを乗せた第十三回縄文の森コンサート「縄文に舞う」は、白井啓治氏の静かな語りから始まった。振り付けとしての手話を初めて見るコスモスの仲間は、「あまり良く分からなかった」と言って苦笑い。手話ばかりに気を取られて、素晴らしい舞いを味わうことが出来ず悔しい思いをしたのも懐かしい思い出のひとつ場面だ。

そして、十三回コンサートから五日後、東日本大震災が勃発、更に福島原発の怖い事故により世界中がパニックになり、放射能が多くの住民の暮らしを奪っていった。

目に見えない悪魔のような放射能、〇〇シーベルトや、メルtdown等耳慣れない言葉が飛び交い、政府及び東電の隠蔽のお蔭で、実態が分からぬまま不安を募らせる人々。

実体そぐわぬ風評による世界を巻き込んだ被害も起き始めていた。

陸平には、真竹の藪が点在し、ヨイショする会では、毎年整備を兼ねて収穫した筍を、オカラ漬けにして、活動日に開く森のレストランで煮物や汁物に使用して味わっていた。

ところが、茨城県にも飛び火した放射能に、陸平の筍まで汚染されて食べられなくなり、伸び放題

の若竹を伐採して田んぼに積み上げる気の滅入る不毛の作業が行われていた。

炭焼き窯も地震で壊れ、陸平名産品として文化祭に販売、活動費用捻出に一役買っていた竹炭を生産する事も出来なくなつた。

何より打撃だったのは、皆で力を合わせて制作した大型の土器や試作品の土器の多くが破損したことだった。

被災した地の資料館への、お見舞いを兼ねた視察旅行で、津波の傷痕を目の当たりにした時のあの衝撃は臉に焼き付いている。

あの頃は、ヨイショする会の研修旅行で訪れる先々で大震災の爪痕や、風評被害の現実にぶち当たり、心が痛む事が多かった。

数々の悲しい苦い体験を踏まえ、それでも尚陸平を愛する人々が集い陸平をヨイショする会のテーマソング「陸平よはるかに」

の石碑建立と、記念誌発行をもつて「陸平をヨイショする会」二十周年の記念事業は完了したのだった。

ピアノの山本光氏と、ケーナ奏者渡辺大輔氏の意気の合ったコラボは満員の聴衆を魅了し、夢の世界へ誘い、最後は定番の「陸平よはるかに」の大合唱で、お開きになった。

久しぶりに思いつ切り大声を出して歌った感動を胸に、その後開かれた茶話会にも参加、出戻り婆さんの充実した一日は終わった。

世界情勢が不穏な動きを見せ始めた昨今、再び軍靴の足音を聞くことの無いように祈りながら、争いの無かった縄文時代に学んで欲しいと願うばかり。

八十路半ばになり、歴史の遺物になりかかっている私でも、生きている限りは好奇心を失わず、

自分達で作る歴史をより良くしたいとの思いで、暮らしている。

ふるさと「風」誌の皆さんの十二年の頑張りを祝し、更に新たな目標に向かって充実の日々が続くことを心から願っています。

(陸平をヨイシヨする会会員)

小生が、この石岡の地に来て最初に会った友が、打田升三兄であった。兄に出会わなかったら今の「ふるさと風」はなかったし、小林幸枝さんとの出会いと「手話舞」という新しい舞台表現は生まれなかった。

三年ほどの腰掛と思ってきた地であるが、この二人との出会いが無かったら、この石岡が終の地になることはなかったと思う。

この二人との出会いが、小生にとってかけがえない友である市川紀行兄との出会いを創造してくれた。

打田升三兄、市川紀行兄にあまえることで、小生この地に暮らす己の意味を見つけられたと言える。ふる里を自らの行動をもってヨイシヨする範を示してくれた市川兄の背を追うように、当ふるさと風も小さ過ぎるふるさとヨイシヨの集まりではあるが、声だけは大きくあれと思っている。

田島早苗姉は、陸平をヨイシヨする会との交流の中で知り合い、今では「ふるさと風」の準会員として、毎月投稿いただいている。

市川兄との出会いを作っていたのだ、合田兄の言われるように、打ちたくても打てない太くて高い杭を、市川兄の背を追って立てたいものと思っている。

(白井啓治)

人類の進化を振り返る

菅原茂美

ふるさとを讃える仲間が集い「風の会」を結成し、その会報発行は、萬12年・連続144号を達成した。2006年6月、第1号発行以来、一度も休む事なく、手作りで毎月発行を続けた。また「継続は力なり」と信じ、全会員、誰一人、一度も休むことなく、毎月投稿を続けた。

読者皆様方のご声援は、我々会員の大きな励みであり、ファイトが継続する原動力となっています。長年のご声援に感謝申し上げ、今後とも交誼のほど、よろしくお願い申し上げます。

*

私自身は07年12月、72歳で中途加入。パウー溢れる先輩達についていけるか、かなり不安があった。しかし本年5月で満10年半、126か月に渡り、懸命に毎月投稿を続けた。

内容は主として自然科学に軸足を置いた随想。私の場合、特に故郷を讃えるというのではなく、人類が長い旅路の果て、この日本までよくぞ辿り着き、我ら子孫を残してくれた：と、ご先祖の旅路に感謝したい一念から筆を執った。

人間はどこからきて、どこへ向かうのか？我々の先祖はどこでどのような暮らしをし、幾多の難関をどのようにして乗り越えてきたか？アフリカを発祥地として、全世界に進展したそのエネルギーと好奇心を心から讃えたい。その一念を書き綴った内容を単行本【遙かなる旅路】と題して、50号までを「上巻」、51～100号を「下巻」として纏め過日発刊した。著書は「まちかど情報センター」に、他の会員著者とともに置いているので、関心をお持ちの方は、ぜひ、ご覧いただければ幸いです。

*

さて人類は、これという生来の武器も持たず、弱肉強食のあのアフリカで、よくぞ生き延びてくれた：と、ただただ感謝あるのみ。武器としての角も牙も鉤爪もなし。さりとて、速い脚があるでなし。結局、直立二足歩行に移行し、体毛を失い、「矢状稜」(しじょうりょう)を失い、火を用い、大脳への流血量を拡大して、言語や道具が発達し、仲間達との連携を深め、他の動物と大きな違いの進化の方向性を獲得した。そのため生存確率は向上し、立派に生き残ってくれた。

直立二足歩行は、四足歩行なら体重を支える前足が自由になり、子供や食糧などを抱え、ひいては指先で細かい細工などができ道具を造れる原動力となった。石器をはじめ道具がなければ、今日の人類進化は見られなかったであろう。

体毛を失った事は、汗腺(特にエクリン腺)発達を促し、長距離を走っても気化熱で、体温上昇を防ぐ事ができた。動物は瞬発力こそあるが、体温上昇のため長距離は走れない。そのため肉の確保は、体位の向上に、大いに役立った。

更に汗腺にはアポクリン腺があり、腋毛・陰毛根などから臭い成分が産生される。しかし、その体臭をキャッチする鋤鼻器(じょびき)は、人類では胎生期に退化してしまった。野生に必須であった臭いによる情報交換機能は失われた。進化の代償として野生を失った事は、人類にとって果たして、幸か不幸か？

野生動物は近親交配を避けるため、この鋤鼻器が活躍するが、人類はそれを失ったせい、か、近親相姦が偶にみられる。近親交配の禁止は、もし生存に不利な悪い遺伝子(例えば過剰なアレルギー体質)が、次世代で重複したら生存に不利なので、それを避

けるシステムである。父と娘はどんなに仲が良くとも、娘は父の体臭を嫌う。その訳は、自分に似た遺伝子を無意識に避けようとする本能のなせる業である。

しかし進化の基本原理を、「生存に有利な形」を残すのが進化と考えるのは間違い。進化とは、遺伝子のDNAが、活性酸素などによりランダムに変化するだけの事。いわゆる無作為な突然変異の積み重ねである。進化を推進する原動力は、一般的に「雌の好み」ともいわれる。悲しいかな雄たる者、いかに腕力が強くとも、雌に嫌われたら子孫は残せない。

人類は野生時代、より足が長く、背の高い者は、より早く敵を見つけ、速く逃げる事ができる。そのような者が生存競争に打ち勝って、より多く子孫を残す事ができた。その願望が今日まで尾を引き、足の長い長身がモデルの理想的スタイルとなった。そうして人類は700万年かけて、身長が1.8m伸びた。

*

また人類の祖先は、気候変動による樹木減少からサバンナへと降り、地上生活の時間が多くなると、太陽光による紫外線直射が強くなり、「皮膚がん」などになり易い。樹から降りた祖先は、皮膚は白色、体毛は黒かったので、やむなく皮膚表面は体毛を捨て、紫外線を防ぐ為にメラニン色素を産生する黒色皮膚へと変遷していった。現在人類は、皮膚の色による差別などがあるため、黒色皮膚を恨みに思う人もあるかもしれないが、人類は皮膚が黒くならなかったら、恐らく滅亡していたであろう。むしろ黒色皮膚を、誇りに思う理解が必要である。

ホモサピエンスは、出アフリカ後、北欧にまで

進出し、紫外線が少ないため、皮膚のメラニン色素を産生する必要は少なくなり、白色皮膚へと変換した。更に先住の旧人ネアンデルタールと混血し、青い目や金髪を受け継いだ。その北欧生まれの白人が、オーストラリアに進出したため、現在、皮膚がん発生が多く悩みの種。

紫外線は体内でビタミンD生成に必須。ビタミンDは魚やキノコに多く含まれ、骨にカルシウムを固着させる。更に免疫強化にも重要な役目がある。それゆえ、もし紫外線は、シミ、皺（しわ）の元と考え、日光浴を避けると、くる病、骨粗鬆症などになり易い。人体に必要な1日のビタミンD量(5μg)を確保するためには、冬の日照時間の少ない時期には最低でも那覇で8分、つくばで22分、札幌で76分、日光浴が必要。

美容のため、度の過ぎた紫外線カットは、健康上、とんでもない障害を招く恐れがある。

米国の調査によると、肉食の多い南部テキサス州で、大腸がんが多く、ベジタリアンの多い北部で、大腸がんが少ないのは常識と思っていたら、結果は真逆で、北部の方が遥かに大腸がん発生率が高かった。理由を細かく検討したら、北部の人達の冬季日光浴時間が、必要量の半分にも満たなかった。更に北部に棲む黒人も病気が多いのは、紫外線不足という報告がある。

以上色々勘案してみると、熱帯で発祥した人類の祖先は、長年かけてその土地に適応した進化を遂げたのに、過剰な好奇心から別世界進出などが災いして、多くの病気を呼び込む結果となった。人類に知恵があるなら、そういう事もクリアしなければ真の文明開化とは言えない。そういう事を無視し、今の今、生活に便利だけを求めて、新天地移住など求めていくと、人類の未来は暗くなる。

環境を汚染してまでも、目先の利益追求だけの「偽の文明」が、多威張りで幅を利かす今日の人類の生活態度は、悲しいかな「種の絶滅」への一里塚となる。

*

さて先祖の「矢状稜」とは、ゴリラなどの頭頂部にみられる、前後に走る骨突起の並びである。固い物を食べるために、下顎から頭頂部まで走る咬筋の付着部位で頑丈な骨である。当然この硬い骨で頭頂に蓋がされているため、大脳が発達しようにもスペースがない。しかし、人類の祖先は、空いた手の指先などで食べ物を加工し、柔らかくにして食べるようになると、強靱な咬筋は不要となる。まして火を使つて食べ物が一層柔らかくなる。益々頑丈な咬筋は不要となる。従つて、300万年ぐらい前に矢状稜は小さくなり、人類から消えてなくなった。重い蓋がなくなると、大脳は存分に幅を利かす事となる。大脳の発達こそが、ヒトを人間らしくした。

さて次は大脳への動脈血大量流入装置の進化である。偉大な文明を生み出すためには、大脳発達が必要の要件である。頭蓋骨底部に、心臓から送られてきた大量の動脈血を通す「動脈孔」が空いているが、この孔の太さは、親戚チンパンジーの3.5倍。大脳は全身酸素必要量の約20%、普通の筋肉の16倍もの酸素が必要との事。それゆえ大脳へ酸素を大量に送る装置の改良は、進化上非常に重要な事であった。

舞鶴で、大相撲の地方巡業の際、祝辞を述べていた市長が、土俵上で倒れた。周りの男どもは右往左往するだけで、何もできない。そこで観客の中の女性看護師が土俵に駆け上がり、懸命に人工呼吸を始めた。若い行司が『女性は土俵から降

りてください』とアナウンスをした。大脳へ酸素が送られなくなると、大脳神経細胞はたちまち壊死してしまう。看護師の機転を、阻止しようとした大相撲の古いしきたり。現場で陣頭指揮できなかった巡業部長。人気興行も、理に叶った時代の変遷に対応する必要がある。

*

さて大脳発達は、生残のための色々な進化を生み出した。固い実を割ったり、根茎を掘り起こす道具としての石器等。鏃(やじり)として狩りのための道具、同じく槍(やり)の穂先の石器等、長い年月をかけ工夫改良を重ねて、効率を上げていった。しかし300万年前までの石斧は、100万年間、全く姿形が変わっていないとの事。改良のスピードは恐ろしく鈍いものであったらしい。人類の大脳はチンパンジーと別れて700万年経って、約1000cc増えたが、そのほとんどは、火を使うようになった約40万年前から急速に増えたもの。大脳容量は、時間と並行して増えたものではない。大脳発達の顕著な効果は言語の発達であった。仲間とのコミュニケーションを密にし、狩りをスムーズに進め、仲間意識を固める絆となったであろう。組織の掟が生まれ、狩猟技術の伝授などを確かなものとし、先祖霊を崇め、原始宗教も芽生えたことであろう。

*

人類は約40万年前から、ようやく「火」を用いるようになった。人類の手により火が用いられるようになってから、急に大脳も拡大した。

我々の直系先祖「ホモ・エレクトス」原人から、ほぼ30万年前に兄貴分の旧人ネアンデルタール人が分離し、アフリカを出、ヨーロッパに進出したが、今から3万年ほど前、この世から姿を消し

てしまった。我々新人「ホモサピエンス」も、今からほぼ20万年前、同じエレクトスから分離した。そして今から7万年前、数百人の規模でアラビア半島に進出した。勿論黒人集団。これが現在の全人類の祖先である。アラビア半島で、人口が1万人ほどに増えた頃、インドネシアのトバ山が大噴火。煤煙で地球表面に太陽光が十分届かず、地球は寒冷化し多くの動植物が死滅。人類の祖先もわずかに1千人ほどに減ってしまった。生き残った人は、頭の回転の良い、いわば、ずる賢い、他人を押しつけても自分だけ生き残ろうとした利己的遺伝子の塊のような人が生き残り、子孫を残した。結局その子孫が今日の我々全人類である。恐らくお人好しの、ゴクラクトンボは、生き残れなかったであろう。

生物が急激にその数を減らした時、生き残った者の遺伝子が子孫に集約し、多様性を失う。これを遺伝学では「ボトルネック効果」という。人類は万物の霊長とかうめばれているが、仲間同士殺し合いをし、戦争がなくならないのは、ボトルネック効果のマイナス面が強く出、利己的な遺伝子で固まった子孫なるが故と考える。

*

さて人類は、詐欺まがい行動・経済戦争・軍事衝突など、理想とする平和で融和な姿とはかなりかけ離れた行動ばかりが目につく。しかしこれも、人類が生き残るための、やむにやまれぬ進化の過程と推察する。生物の生きざまの基本は「生存競争」。私の趣味の一つは家庭菜園だが、日曜朝の「野菜の時間」の先生が言っていた。最近の野菜の種子は、発芽率ほぼ100%。だが一か所に4〜5個ずつ種を播き、競争で成長させ、間引きながら最後は一本に仕立てる……。

又、私は獣医師であるが、飼育する豚を見てみると、不給餌で、豚群のボスは腹一杯食べているのに、順位の低いものが食べようとすると、意地悪く邪魔をする。人間も貧乏人から金を巻き上げる税制や、薄利多売の合法的商売があるが、豚の欲張り根性と変わらない。そして米国アマゾンの社長の資産が11,8兆円とか。ほんの一部の富豪が国の富の大半を占めている。自由主義・民主主義とは、一体何ぞや？

とにかく金と権力が大手を振って歩く世の中を何とかして一掃しなければならぬ。清廉潔白だけで世の中が通らないのは分かるが、悪い奴ほどよく眠れないように、ハリネズミの剥製で作った枕でもプレゼントするか。人類は折角大脳を膨らましたのだから、もう少し平等精神が機能し、誰もがこの世に生まれた喜びを、分かち合える政治ができないものか？ 弱肉強食だけが社会の摂理とは、聞いて悲しくなる。

*

しかし、人類は醜い争い事ばかりが進化したわけではない。鳥類には「擬傷」行為などがみられるが、人類でも自己犠牲による利他行為が多々ある。芸術や文学界などで、リアルな写真だけではなく、空想上の、非現実的な「美」を求め、限りなき探求がみられる。更に音楽・哲学・宗教などの発達は、人心の安寧を深め、心豊かな寛容の精神を高めている。動物でも、親子や仲間同士の、ほろりとするような愛情はあるが、人類においては、本能的愛情を超えて、森羅万象へと思いを巡らす高次の思想的展開がある。アイヌのような自然に対する感謝の気持ちや常持ち続けるなど、神々しくさえ感じる。

人類は狩猟採集の流浪生活から、動物を飼い馴

地域に眠る埋もれた歴史(37) 木村 進

・12年の歳月はまさに宝

「ふるさと風の会」が12年という節目を突破しました。ここ茨城県石岡に誕生して「ものがたりの降る里にしよう」と会員が毎月記事を書き、12年で144号を無事発行できたことは奇跡のようです。

石岡は古くから常陸国の国府があつたというところで「歴史の里」などとも言われますが、右を向いても左を見てもなんだか「ふるさと自慢」をする人はいても、しっかりと周りを見て、批判を恐れず地に足を踏ん張って発言する人が少ない町のように思います。そんな中でこの「ふるさと風の会」は違っています。皆さんがしっかりと自己を主張しておられるようです。

私がこの会に入会して最初に記事を書いたのは2012年の11月です。からまだ半分にも達していません。それでも毎回記事を書き続けることがどんなに大変かと思つていきますので、最初から記事を書き続けておられる先輩たちには頭が上がりません。

最初にこの会に参加させていただいた当時に、先輩の方々より「木村さんはどちらの生れですか？」と質問を受けました。私が「新潟県です」というと「やはりへそ者ですね。この会の人はへそ者」ばかりですね」といつて笑われました。わたしも石岡に来たのは10年少し前位ですから、この会がスタートしたころからです。やはり地元の方々から見ると「よそ者」です。まあ最近では街おこしも「よそ者」「ばか者」「若者」が成功させる合言葉のように言われていますが、これもそれぞれの立場が違えばこの解釈も変わってくる

でしょう。

・ふるさとはどこに

さて、「ふるさと風の会」という名前の「ふるさと」とは一体どういう意味でしょうか？

ふるさととは「故郷」と書くように故郷の事です。よね。生まれ育ったところが「ふるさと」(＝生まれ故郷)というのが一般的な解釈ですが、生まれ育って小学校、中学校までその土地にいて親兄弟や親せき、そして一緒に遊んだり勉強したりした仲間がたくさん周りにいる場所が一般的に「故郷」となるのでしょうか。でもよく考えてみてください。今このような場所がある人はどのくらいいるのでしょうか。親の転勤で子供の頃に学校を代わる、いろいろな事情で別な土地に移る、また今やグローバルな時代で親が海外に移ったり国際結婚したり……様々なケースが考えられます。私の場合は、生まれは新潟県、幼稚園や小学1年までは横浜、その後東京の多摩地区に移って、結局小学校は3つの学校に行きました。中学からは地元から少し離れた市立の中学・高校に通いましたので小学校からの友達とも疎遠になりました。茨城県には就職した職場先が茨城県ということをやってきました。そして今となつては過ぎた年月でいえば茨城県が一番長くなりました。

企業に入るといろいろな県人会などが内部組織としてありましたが、これも私を迎えてくれる場所はどこにもありませんでした。この県人会という組織の入会の基準が「中学校を卒業する時までにいた県」というような暗黙の決まりがあつたように思います。この定義で行くと私には「ふるさと」がありません。

私は1年半ほど前に「石岡地方のふるさと昔話」

らし、植物を栽培する定着生活へと進化した。しかし、人智を尽くして今急ぐべき事は、環境の保全。資源枯渇を防ぐ事。日本では地方の過疎化を防ぎ、大都会への人口集中を防ぐため、都道府県制を廃し、道州制を確立する事。国の役目は外交・軍事と憲法の適正運用。地方政府は自治権の確立と自己責任で財政運営。借金は厳禁。現在の日本は明治政府樹立当時の中央集権過剰。地方は中央に隷属を強いられている。自立を目指した変革をしようにも、国税にみんな持つていかれ、やむなき隷属は情けない。

何はともあれ、人類の永遠の課題は、争いをなくし、全世界が、皆仲良く暮らせること。

さて科学の発達には目覚ましいものがある。マヤ文明の1年の時間測定など現代科学と小数点以下4桁まで正確だといわれる。そして生物学・遺伝学・物理学・化学等、「人間とは何か」の難問を、大方科学的に解析してくれる。更に宇宙にまでその観測を伸ばし、広大な宇宙の成り立ちを、詳らか(つまびらか)にしてくれる。この宇宙で人間の存在とは？ 私の呟きの一句

◎ この俺は 宇宙座標の どこにある？

*

我々「風の会」は、どこからも補助金など受けず、自己責任で何でも主張し、ささやか乍らも社会が成熟する原動力の一助になれば……と考えている。定年退職後の余裕ある時間を、ただ一筋に筆を執る。ボケ防止のためもあるが、筆を執り続ける喜び。ものを書くためには、その何倍もの勉強時間が必要であるが、それも真に心地よいもの。私達の趣旨にご賛同の方々のご加入があれば幸甚です。真に楽しい会ですよ！

という本を書きました。この石岡地方に伝わっている昔話をどうしても残しておきたい、昔の話に新しい命を吹き込みたいとの思いが強くなってきたからなのです。そして題名に「ふるさと」という言葉を付けさせていただきました。この本のあとがきに書かせていただいた言葉をここに紹介させていただきます。

「私たちが「ふるさと」を思うとき、そこに伝承された民話（伝承民話）が過去・現代・未来につながる架け橋になっていることに気づかされます。昔話や民話は昔から全く変わらずに伝わることはほとんどないでしょう。時には忘れられて消えてしまつて、また復活したものだってあるのです。この民話が無くなった地域は心の古里もなくなつてしまうことになります。故郷に残る昔話をもう一度掘り起こして読み返していただきたいと思ひます。」

「ここでいっている「ふるさと」は生まれ育つた場所などという単純なくりでは分けることができます。住んで、暮らして、昔からの流れを理解して、将来を自分たちにとって意味あるものにしていきたいと願う気持ちが持てる場所がわたしにとっての「ふるさと」なのです。よそ者も、地元民も一緒に、何の区別もありません。でも人間ですから気の合った仲間や幼い時から知っている人たちに特別な親しみを感じるものはあると思います。それはそれで大切にすればよいことで、「ふるさと」思うことに区別はいらないと思います。地元出身で地元に住んでいても知らないことは山ほどあるのではないのでしょうか？」

・なぜ「地域に眠る埋もれた歴史」の掘り起こしなのか？

ふるさと風の会に書いた原稿のタイトルの初期

の頃から少し書き出してみます。「太田善光寺万灯祭」「古代製塩」「側高神社」「和紙の道」「シルクロードと金色姫伝説」「筑波四面薬師を巡る」「松虫姫伝説が意味するもの」……などどれも今となつても思い出すと懐かしいものばかりです。太田善光寺ではそこに伝わっていた万灯祭の歌「お池の松は姫の松」のお姫様は小田氏の姫？とか盆踊りに歌われていた潮来節とのつながりを考えたり、古代製塩では浮島の国指定史跡の「広畑貝塚」を訪れた時の思いや古代製塩法のことを調べて書き、側高（そばたか）神社では千葉県に広がる祭神が謎の神社を追いかけました。また和紙の道はあまり知られていない茨城県北部の美和から続く和紙街道と阿波の忌部氏などが那珂川をさかのぼっていった？歴史に思いを巡らせてみました。その他皆、私にとっては興味深かったものばかりなのです。

ふるさとは誰にでもあると思います。生れ育つた場所が心のふるさとであればその人にとってはその場所が「ふるさと」で良いでしょう。しかしあまりそんな場所は無いと思つていても、たとえば現在住んでいる場所でも、その地域に眠つた歴史を掘り返してみると意外にも昔の人の息吹を感じてしまう場合があります。すると昔の出来事や歴史のちよつとしたことが、今までそこに住んでいない人でも同じ日本人にはDNAでちゃんと理解できるのです。そう、昔の人がその掘り起こしてくれた人に話しかけてくるのです。

私は今から7、8年前頃から、石岡市のみならず、出かけた先の主に茨城県の各地で何か古いものや気になるものを見つけたら必ず立ち寄つてみるようになりました。そしてそのいわれや歴史を調べブログに書いてきたのです。するとその観光案内などに書かれた表面的な記載とは別な興味深い

ことがらを見つけます。そしてその意味やいわれを知りたいと思うようになりました。その場所に立つて、そのときに見た景色・感じた風のおいなどは、その人がそこに生まれ育つた場所でもなくとも感じることは出来ます。その考える基になるのは大概の場合、古代に書かれた風土記のような記述書などが中心となります。いわゆる教科書的な歴史書は事実の事柄はある程度信用しますが、多くの場合に時の権力者などが都合のよいように書き換えているものが多く散見され、その色眼鏡を出来るだけ薄めながら、他の記述などと比べてみて自分なりの解釈をすることが必要となるように思われます。また各地を廻つてみるとお互いにつながりのある関連した事柄によく出会います。するとうれしくなつてまたその関連しそうな場所に行つて見たくなつたりするのです。ですからどこにでも心のふるさとはあるし、埋もれた歴史で掘り起こしを待っているところはたくさんあるように思います。

「ふるさと」を想うとき「俺の街」「私の生活する仲間がいる街」という思いをあまり強く抱いてしまつと、昔の「邑（むら）」という部落意識が消えなくなつてしまします。平成の大合併で石岡と合併した「八郷町」は昭和30年に柿岡町と七つの村が合併して八郷町となりましたが、その前の明治期には山根⁵³カ村があり、それぞれの集落単位でのまとまりをもつという行政意識が強かったのです。それから100年ほどが経ち、八郷地区はある程度のまとまりができていたようです。一方石岡市の方も「府中平村」に山根地区の染谷などが加わり石岡町が誕生したが、高浜や三村・石川などが加わつたのはまだ60、70年前に他なりません。これらの地区も石岡（常陸府中）とはまた別な歴

史（特に水戸藩であった）があり、いまだ同じ流れではないように思われますが、そんな違いをお互いが知ることによって理解が深まるものと思われ八郷も旧石岡もともにお互いの歴史を早く理解してお互いとその埋もれた歴史の正しい理解をすればきつとお互いの気持ちも理解できるような気がしています。

早く、私がこの茨城の県南地区に来て感じた違和感が払拭されて、よそ者も理解していただけるようにこれからも地元元埋もれた歴史などを掘り起こして生きたいと思っています。

おかげさまで十二周年

兼平智恵子

当会報の白井啓治代表の「自分を表現する文章に上手、下手などといった尺度はない。あるのは思いの丈」。この言葉を信じながら、毎回〆切オーバー提出の十二年間でした。

平成十三年に（平成二年二月、石岡へ在住）歴史ボランティアガイドの会員養成講座を受講した時に二つの驚きがありました。

一、石岡には古代からの、とてつもない深い歴史がある事。

二、その歴史を知らない、市民の方々が多い事。

この深い石岡の歴史を学び、市民の皆さんにお伝えしたいという気持ちが高まりました。

十二年前の石岡の街並みは現在より以上に街おこしの気運が高まっていました。

・ふるさと風に石岡の歴史を紹介しつつ、

・歴史ボランティアの会員として石岡の歴史紹介、
・絵画での紹介（東京都立美術館・八重洲ギャラリー・つくば美術館等に歴史絵出品）

歴史に夢中な日々を送っていました。

平成十五年四月からガイドとしてスタート。

常陸風土記の丘を見学の県西、県南、県北、鹿行地域の小学六年生の皆さんが年間三十〜四十校訪れていました。

ここであちよつと気になる疑問が覗いていました。なぜ、石岡市内の小学生の訪れがないのだろう？

そのうち大人への案内も任せられ、市街地の名所案内を、若さでこなせた頃が眩しいほどに思い出されます。

また、ふるさと風にはガイド案内状況等を掲載、紙面での歴史案内となりました。

そんな中「歴史を案内する人が、間違った事を書いてはいけない！充分に検証しなければならぬ」とお叱りやご指導を下さった方がありました。

ふるさと風を愛読して頂いていた、今は亡き審書房の太田尚一様でした。太田様はお会いする度に小学生への郷土の歴史を伝える大切さを、熱く語ってくれました。

ここで太田様がある方に送った手紙文の中から一部抜粋させて頂きました。

「すべての難関を克服するに最も基本的な条件は教育であり知恵である。今、郷土の石岡の衰退ぶりを目の当たりにして、まず必要と感ずることは、子供達や若者の愛郷心を育むことである。それは、子供達の愛郷心を育てる環境を整えることである。将来主体的な、まち創りをめざすに於いて、郷土に誇りをもつて育った子供達ほど心強い

味方、勢力（人材）はない。」

さてここ四、五年常陸風土記の丘を見学する小学校が減少してきました。平成二五、二六年は各二十五校、平成二七が一七校、平成二八が十六校に。

はたして…。教育制度の変化によるものか、少子化の影響かと、石岡市ふるさと歴史館濱田管理代表は

予想している。

ところが昨年平成二十九年、変化が現れました。増加して二十二校に、その内十三校（延が、石岡市内の学校からだったのです）。

石岡市では一昨年より、小学生、中学生向けのふるさと学習が取り入れられました。今年度四月、五月現在、次々と案内要請が入ってきています。

春休み中の三月末に、石岡市ふるさと歴史館に新六年生の男子が飛び込んできました。

「石岡の中世時代の歴史が知りたいんですが！」

「歴史散策コース案内」のパンフレット見て、目まん丸！「え！すげえ、全部のコースまわってみる！」と飛び出していきました。頼もしい新六年生！感想を聞いてみたい！

太田様のいう郷土に誇りを持つ、心強い人材の続出が待たれます。十二年目の節目に太田様にご報告したい。

・二十五日流山市探訪の会の皆様へのご案内

・三十一日市内の六年生のご案内を控え

十二、歳重ねた体に入れて、皆様との出会を楽しみながら、新たな節目に向って進みたい。ご指導とご愛読の程よろしくお願いいたします。

・みどり咲くさつきのそらに

智恵子

ふるさと風の会 12 周年記念祭

第一弾：ふるさと風の物語い展

6月1日(金)～6月3日(日)

石岡市まちかど情報センター

(10時～18時)

ふるさと風の会は、2006年6月民話ルネサンス講座の受講生と共に「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」を基軸としたふるさと紙「ふるさと風」を発行する会です。今年の5月号で第144号となり、満十二周年を迎えることになりました。

ふるさと風紙発行12周年を記念し、その第一弾として「ふるさと風の物語展」を6月1日～3日まで、石岡市まちかど情報センターで開催いたします。ここでは、ふるさと風の会の会員がこの12年間に書き綴ってきたものを小冊子に編集した文庫本の展示・販売とともに、ふるさと風の会の柱である「ふるさととは物語の降る里」のもとにふるさと民話の朗読、全員参加のふるさと語ろう会を開催いたします。

会場には、会員であることば絵作家の兼平智恵子の描いた「常世の国の五百相」が、全壁面に展示されます。



ふるさと風の文庫



ふるさと風の文庫・主な作品

- ・打田 昇三…打田昇三全集（全6巻）、
歴史の嘘、私本平家物語、
私本将門記他
- ・兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、
ふるさと風のことば他
- ・伊東 弓子…風の景他
- ・小林 幸枝…風に舞う他
- ・菅原 茂美…遙かなる旅路（1、2）
- ・木村 進 …地域に埋もれた歴史シリーズ
（全24巻）
石岡地方のふるさと昔話、
茨城のちょっと面白い昔話他
- ・白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、
霞ヶ浦の紅い鯨、
朗読/ふるさと物語…他

ふるさと風の会事務局 〒315-0001 茨城県石岡市石岡 13979-2 Tel 080-3125-1307

12年前のギター文化館記録から 木下明男

私が「ふるさと風の会」に参加して約2年になる。会報「ふるさと風」が今年で12年目を迎えると言う。白井先生から、その記念誌に何か書いて下さいと、依頼があった。何を書いたら良いか、あれこれ色々考え散々迷い、思い起こしてみた。今から12年前(2006年)会報が発刊された年に白井先生と初めて出会った事を思い出した。この年の夏ごろ、先生が突然訪ねてきて、此のギター文化館を発信基地として、常世の国の恋物語百を考えていると、切り出された。私もこの頃、ギター館の新たな使い道を考えていたのので、何の迷いもなく承知の返事をした。石岡八郷に語り継がれている話をベースとして、恋物語を書き朗読舞の小林さんに舞って貰うと熱く語る白井先生…この出会いが、長い付き合いの始まりだった。

■2006年12月16日に、早速「ことば座公演」(プレ公演)が始まった。その時、ギター文化館の職員だったS君が、ブログを開始したばかり。

《今日のギター文化館はちよっと一味違ったイベントがありました。「ことば座」というグループの公演を行ったのですが、ギター文化館のホールを使って「ことばの力」を表現するような、舞台でした。内容としては、脚本家の近藤治雄さんが「言葉とは」というお話を聞かせてくれて、その後に「朗読」を行い、最後にことば座の主宰である小林幸枝さんが「古今集」の朗読に併せて舞う「朗読舞」の舞台でした。小林さんは「囃咄」の舞姫で、その舞も「手話」をモチーフに体全体で表現するというもので、見る方に迫る感じで物語を伝えてきます。なかなか見られる舞台ではあ

りません、もちろん僕自身も初めてのものですが心に入ってくるものを感じました。今回は「プレ公演」という事で、来年2月から定期的にこのギター文化館で舞台を行う予定です。》



このような「音楽」以外のホールの活用も、これからのギター文化館でどんどん仕掛けていきたいですね。まさに「可能性無限大」です。

■2007年2月20日に、愈々第一回目の公演が。

《日曜日は午後から場所貸しのイベントが行われました。以前にもご案内した「ことば座」の公演が行われました。先日常陽新聞にも取り上げられて、記事になりました。前回プレ講演と言うことで、12月に一度公演したのですが、今回が本番初公演となります。》



《地元石岡に伝わる伝説、逸話をもとに脚本家の白井啓治さんが物語を作り、それを囃咄の舞姫、小林幸枝さんが語りに併せて舞う、手話を織り込んだ舞を演ずるものです。手話を織り込んだと言うことで、非常に表現が豊になり体全体で表現され、手話がわからない私達でもその雰囲気を感じ取ることが出来ます。素晴らしい演技でした、次回が楽しみです。》



■2007年5月20日に、第二回目の公演が《いつもと雰囲気の違いギター文化館のホールです。本日のイベント「ことば座」の「公演での飾り付けになります。今回で3回目となりますが、毎回面白い物語が手話、というか「舞話」で表現されます。今回のお話は、地元石岡に伝わるものでも「龍神山」と「峰寺山」という2つの八郷の山に関わる伝説でした。かなしい恋物語、素敵な恋物語、日本の神話の時代のお話です。》

《以前も紹介しましたが、この小林幸枝さんは囃咄です。耳が聞こえませんが手話を盛り込んだ「舞」によってその伝説を表現します。それ

だけに説得力ある芝居になります。茨城・石岡・八郷のような古い土地、風土記や古事記・日本書紀の時代から歴史のある土地では、さまざま伝説・逸話があることでしょうが、我々は全くと言っていいほど知りません。正直興味も示さないと云うのが現実でしょう。しかしこのような形で、その伝説や歴史に触れると、なにやら神話時代にタイムスリップして歴史探究をしているような不思議な気持ちになります。興味も湧いてきます。もともと古代の歴史が好きなので、資料があるなら見たい気がした。むかし、現代語訳の古事記を読んだことがあります。中学校の頃でしたでしょうか？ ふとしたことから、イザナミ・イザナギの物語に触れて、興味を持ったものです。何となく、あり得ない話も多いのですが、神秘的な国、素敵な国に在るのだなと感じる瞬間でした。」



日本再発見…そんな事を考える1日でした。

■2007年7月16日に、第三回目の公演が「日曜日は「ことば座」の第3回公演となりました。今回も「書」の先生やその生徒が書いた様々な「書」が会場を飾りました。「歌」「顔」「絵」様々なものが飾り付けられます。すだれを垂らし、それらを飾り付けるとギター文化館の雰囲気も一変・・・どこか「和」の雰囲気をもった空間に変わります。何というか、この雰囲気は私にとっても好きです。ギター文化館の「洋」の雰囲気は完全に殺されることなく「和」と解け合って、全く別の不思議な、でも素敵な雰囲気を感じ始める・・・そんな中で今回は3部構成での公演となりました。」



「今回は今までと違う事もありました。BGMです。今回の公演では、ここで作成した「ギターBGM」を使つての公演となりました。音楽の挿入や音量はいつもこちらで調整するのですが、ちょっと緊張していました。音楽がどう朗読と絡むのか…舞とどんな感じで混じるのか。」

「実際にやって、こういった舞台にも「ギターの音色」が合うと言うことを感じました。この舞台を構成する脚本家が評するように、小林幸枝さんの舞は新しいスタイルの舞であり、彼女の舞そのものがもつ雰囲気はどこか古風な部分もあるもの

の、こぢんまりとせずとてもモダンな雰囲気を持つています。そのためなのかこういった場所、洋風な中にも和のテイストが絡んでいる不思議な空間ではより一層引き立つ感じがします。練習やリハールサルの時とは雰囲気が全然違いました。見に来ていたお客様からも「ギターの音色と合うんですね」などというコメントが耳に聞こえて、好評だったようでひと安心です。」

嵐の中ギター文化館に足を運んで下さった皆様、本当にありがとうございます。次回の公演は10月21日(日)です。是非皆さんも見に来られてはいいかがでしょうか? 「一見の価値有り」です。

奄美大島

小林幸枝

今月号でふるさと風も十二年となりました。文章を書くなんて、と思っていました。白井先生から、文章を書くというのは、どんな内容でも必ず自分の思いや考えを無意識のうちに書くものだから、舞台俳優にはとても重要なことです。そう言われてどんな内容でも書いていくうちにとうとう144号になりました。自分でもびっくりです。

ことば座も、十二年になります。常世の国の恋物語も、白井先生に頑張ってもらい百を達成できるように、私も頑張つてまいりますので、これからもよろしく応援お願いいたします。

どんなことでもという先生の言葉に従って、今回私の好きな奄美大島を紹介してみたいと思います。

奄美大島の魅力は、ゆっくり、のんびりしたと

ことです。サンゴ礁に囲まれた美しい海、白い砂浜にアダシが茂り、エメラルドブルーの海には色鮮やかな魚たちが泳ぎ、楽園のようなところです。

波静かな海の中を色鮮やかな魚たちが泳いでいるのをぼんやり見ていると、魚たちって泳いで疲れないのかな、と思ってしまう。でも波に揺られているのだから、疲れることないなと自分の毎日の慌ただしいだけの毎日を反省させられます。

展望台から夕陽を望むと、神秘的な景色に息がのまれます。

山から海へ流れ落ちる「篠穂の滝」があり、カヤックで漕ぎ出して見上げると、その絶景に目を奪われて動くことが出来なくなってしまう。

奄美大島で最も美しいと言われているビーチは、土盛海岸です。弧を描いて広がる真っ白な砂浜に、天然記念物のオオヤドカリが沢山歩いています。

エメラルドグリーンからコバルトブルーへと見事なグラデーションを展開する海には、岩礁が点在しており、色とりどりの魚が泳いでいます。まるで天国のような景色です。

奄美は食べ物もおいしく、私は鶏飯が大好きです。ご飯に鶏肉、錦糸卵、椎茸、パイナップルなどをのせて鶏ガラスープをかけて食べます。この鶏飯はどんなに食欲がない時でも食べられます。そんなことを思い出していると、今すぐにも出かけて行きたくなってしまう。

第四回学習会をむかえる

伊東弓子

御留川を捜して歩き続けてきたが、それらしき場所は殆どなかった。地名が残っているから推測

出来る所はあったが、それも五本の指に入る位の場所だった。考えてみれば四百年〜百五十年も前のことだし、況して近代工事で変化した自然の地形、人間生活の変化で諦めるほかない状況だ。漁を糧とした漁師の姿も、極端少なくなつた。(旧玉里地区にはない)加工品として近隣から集まってくる魚はあっても、生の魚は中々見ることが出来ない。元来いた魚を喰い尽したのかアメリカナマズの死骸すら姿もない。

釣人が水際で釣りを楽しんでいる姿はよく見る。ナンバーを見ると遠くからの釣客だとわかる。私は挨拶を常にして通り過ぎるが、その瞬間に「茶捨てて行かないでね。私達の故郷、生活する場所だから、他所から来て汚して行かないでね」という気持ちにむらむらと湧いてくる。それでも体裁よく「釣れますか」と二重人格的な言葉で終わるが、以前は自分たちの生活の場を守るために、新入者との争いは、血を流すまで激しいものだったと聞く。釣人だけではなく地元の人、犬の散歩に行く時、田畑への近道を通る時、ポイ捨てポイ投げをして行かないとも限らない。コスモスや菜の花を咲かせて美しさに酔っていても、必要ない物を身から放して何処行こうとも無関心なのが人間なのかと嘆くだけの私。

川は小さくなつてしまった。以前、空と川は一帯だった。水面は空を写し、水辺の草木は川と田を仲良く繋ぎ合う手であった。田に豊かな栄養を送ったり、魚たちの産卵の場であった。相互扶助の間でありながら争いをする関係でもあった。そこに人間の生活もあったし、逞しく生きてきた。今は争いを起こさないよう平和の名の元に堤防で区切られ、優劣のレッテルをつけられた。すべて人間が支配してしまった。子供の頃に見た川とは

違つて形も、働きも、美しさもちつぽけなものになつてしまった。「川が賑やかだった。魚捕りの船が沢山あった。川は生きてたんだ」と、ある漁師が語ってくれた遠い昔の姿。

江戸時代の「御留川」に停まらず、海であり、川であり、湖になり、溜池となつた歴史を見詰めてみたい。関東平野が海だった頃、人が住みだした時代、人が移住し始まつて闘争、征服、服従が繰り返され、この周辺に住み着いて生産を起し、生活を安定させ長い時間にかけて豊かな文化を育んできたことだろう。今、私はその通過点の一点にいる。そして、この先も続いていくことだろうと思うと、己の小ささを感じる。否自分の存在価値を感じて勇気が湧いてくるのだから「御留川研究会」に力が入つて今日も動いている。

この流れの周辺に多い古墳は、何時造られたのか、どんな人達が何の為に造つたのか、みんなで勉強しなきゃ、と思ひ立つた、と同時に、常陸国風土記に綴られた物がこの周辺に多いことも何か興味をそられた。物語の土台になった人々の生活、自然などから当時の事を勉強することを決めた。

「古墳を造つた人々」常陸国風土記に登場する人々・自然」と題して専門的な勉強をすることにした。今回は私自身の勉強にもなった。役所への手続き、依頼する講師への書類の書き方等、苦手な面を乗り越えるよい機会を得られた。

準備の方は万端、と気負ひ込んでいたが、一抹の不安があった。それは「みのーれ」「コスモス」会場において大勢集めての取組事業がある様子だった。人が集まってくれるだろうかという不安だったが、三十八人という参加に思わず声を上げて喜び、叫びたいおもいだつた。

「古墳を造った人々」という題で、生涯学習センターの本田学芸員の授業を受けた。外海から内海に入ってきた畿内人は、地形的にも気候の面から、生活上の豊かさにと目を付け前々から住み着いていた古代人を支配していったようだ。五、七世紀にかけて造られた古墳の規模、形、場所さまざまだが、霞ヶ浦周辺の古墳との関連の中で、玉里地区の古墳について集中的に話してくださった。一つ一つに葬られた権力者の姿、形、人間性を忍ぶのも愉快だろうと思いつつ話を聞いていた一瞬、聞き逃したりしていたこともある。この規模の物を造った背景には、権力者と支配される側の有り様が目に浮かぶ。場所もさまざま。高い所に、平地に、水辺近くにと、どんな願いを込めて、何を祈り、この地に眠ったのだろう。後の人によって壊され、崩されたりして形を変えたもの、忘れられたものもあるだろう。上からお達しがある、小規模になっていったのも現代に通じる何かを感じる。

休息の時間をもって温かいお茶と、甘いチョコで寛ぎ次の勉強に入った。

「常陸国風土記に」に登場する人々・自然」という題で、行方市沖洲の彫刻家宮路久子氏の授業だった。当時の中央が各国々の様子を記載させて提出させたものと聞くが、大半が残っていない中で常陸国の物があるのは喜ばしく思う。特に行方地区の多いこと、倭尊命に纏わる話が多いことも架空の人物、伝説と言われるが、それなりにモデルになった人物はいたらうし、未開の地の大自然を背景に平定されていく人間社会や人間模様が頭の中を駆け巡っていた。千三百年前の社会の一面、今と何ら変わらない人間社会の宿命を思う。変わらないのは豊かな自然だけだろう。

お二人の授業から、歴史を学ぶことは誠実に捕らえていくと教えてくださったことに尽きる。県南の広い範囲と、中国、朝鮮、畿内を繋ぐ深い授業だった。この感動を忘れることなく自分たちの足で目で耳で膚で、その地を尋ねて新たに感じるものを受け取りたい。

一つ、今月中心になった玉里の古墳を歩いて権力者の眠る所を尋ねようと思う。

二つ、常陸国風土記の遺称地めぐりも予定していこうと思う。

帰り際は、知り合い同士の会話、来てくださった人達の挨拶があちこちで輪を作っていた。よい場所となり、よい機会が出来た。帰りがけの見送りも次への期待に繋がっていく大切なものだと思う。コスモホール入口右に置かれている宮路先生の作品「バイオリンを弾く少女」「樹樹」の像を案内していると、コスモスの講演が終えて出てきた人たちが声をかけてくれた。二、三日後にみのーれで歴史の講演に参加していた人が「御留川の方の講演どうだった。こつちもいいお話し聞けたよ」と、様子を知らせてくれた。あちこちで「我が故郷」の歴史の話しが盛んになっていくことを願っている。

その間に後片付けはどんどん進んでいた。一息つく暇もなく解散することになった。学習することはいくつになっても大切なことだ。今日はよかった、と自画自賛しながら早春の山路を帰った。

冬が過ぎて希望への春をむかえる。私も生命ある限り続けていきたいと心をあらたにした。

菜の花の咲く堤防に芥を生かして、御留川アトはどうだろう。

堤を生かしたマラソン、歩こうの集いは、筑波から潮来へのサイクリング道路との関係行事は、

中学校への展示参加は…願ってすすむことは、願いが実現に到着する道だと思って歩いていこう。

石岡育ち初参加の弁

菊池孝夫

たまたま立ち寄った市立図書館で手に取った、「ふるさと風」の論集。帰宅して一読して、そこに記されている幾つもの文章に思わず心惹かれてしまった。早速、文末の案内に書かれていた電話番号に電話して、白井代表から参加歓迎の言葉を頂き、三月の例会に初めて出席しました。

席上、先輩諸兄姉の話に感心するばかりで、この会の存在を知ることの遅きに失した事が残念でなりませんでした。(すでに十二年も活動されていたというのに)

聞いたところでは、会員諸氏は全て地元以外の人であるとの事で、はえ抜きの人間として喜んで参加する事にしました。

次回、四月七日には、何か書いたものを持って来るようにとの話でしたが、あらためて考えてみると、まとまった文章など日記や手紙以外、それ程書いた事もなく、余り自信はありませんが、参加する以上、書くことにしましょう。

古代中国には、「野に遺賢無し」という言葉があります。

中国王朝では、「科挙」という官吏登用試験制度によって、在野の秀才と言われる人々を集めてしまったので、国中に賢人は残っていない筈だと自慢したのでした。(選に漏れた中にはすぐれた文人もいました。)

私は、「野に遺賢有り」というのが持論で、今回

いみじくも、それが立証された次第です。

次回以降もがんばってかくつもりですので、宜しく願います。分野は問わないとの話ですので、なるべく変わったものを書こうと思います。

(第一回原稿)

パチンコ考現学(一)

パチンコというと「なあんだ」なんて軽く言う人が多い。ところが、このパチンコ業界、市場規模は二十兆円を超える日本の産業を支える巨大市場なのである。その発展段階で、パチンコ台に使用される半導体(ICやらLSIやらマイクロコンピュータetc)、パチンコ玉を打ち出すためのサーボモーターという小型のモーター。液晶画面。パチンコ台を制御するコンピュータ・ソフト。これらが今日のIT産業を支える大きな原動力となったのである。

一時は、万を超える店舗があり、その従業員数も数十万人となる。関連企業を加えれば百万人をはるかに超える。

この石岡市、人口八万人未満であるが、近隣を併せると十を超す店舗がある。そこで働く人も数百人となる。

ひと頃のブームは去ったとはいえ、遊戯人口は二千万とも言われている。

最近では「パチンコ依存症」が社会問題となつてマスコミでも取り上げられている。その射倖性の高さから、(時に一日数十万円から百万円のもうけ)夢中になってしまう人が続出した。

筆者が初めてパチンコをしたのは十代の頃。市内では、商店街の中に小さな店が四軒程。お世辞にもきれいな店ではない店で、中では大音量で音楽を流し、店員の「いらっしやいませ」の声が響

き、開店時には「軍艦マーチ」が轟く。現在は全く様変わりしてしまった。

(筆者は、電気工事の仕事をしていて、パチンコ店の設計をした事があるので、一般の人より多くの知識がある)

パチンコに興味のない人には無関係に思われるだろうが、実は人々の生活にも密接に結びついている。又次の機会に、現在のこの業種について書いてみようと思う。

※お断りしておくが、パチンコをすすめている訳ではありません。
ん。

菅原茂美「遙かなる旅路」第125話

偽文明(目先の利益追求)

菅原茂美

『現在の地球は未来の子孫からの預かりもの』この言葉は、環境保全に関する資料などに、よく出てくる言葉である。

現在、繁栄している文明は、あまりにも利根的で、目先の利益追求に拘り過ぎ。未来の子孫が安寧に暮らせる理想像からは、ほど遠い感じがする。交通機関は、何もかにもあんなに早くなったからと言って、それがなんだというの？ 衣食住も豪華になり過ぎた。

今、この世に生きている我々は、『人生は二度ない。存分に楽しまなきゃ』とばかりに、環境が荒れようが、資源が枯渇しようが、目一杯、生活をエンジョイする傾向が、強すぎる。

活火山なのにその斜面にスキー場を造ったり、北米では、かつてリョコウバトが渡りの時には、地面が暗くなるほど巨大な数であったというが、その肉の美味しさに、悉く狩り尽くし、絶滅に迫りやうった。又、北米を侵略した欧州白人は、先住

民を兵糧攻めにするため、6000万頭もいたアメリカバイソン(野生)を殺し、1890年には、わずか、1000頭まで激減させた。やつと絶滅に気が付き殺戮を止めたという。

日本でも、ウナギやクロマグロ(日本は2年連続漁獲制限違反)が絶え果てようとしているのに、飽くなき欲望が、なおも追い打ちをかける。また明治政府は、次三男対策として北海道開拓を試みたが、家畜がエゾオオカミに襲われるので、懸賞金を出して狼退治をし、1900年には絶滅。その為に今、エゾシカが増えすぎ(65万頭、数種の植物も絶滅。人身事故や「落角」により、自動車や耕運機事故が続発。森林被害も甚大。

偽文明の典型は、水や空気や土壌の汚染。鉱物・生物等、資源枯渇寸前。それにもかかわらず世界各国は、自国経済第一主義。国際協調を乱し争いが絶えない。更に言論統制。未開地開拓。先進国による先住民の生命財産略奪。米国の人口3億人に銃3億丁。学校で銃乱射頻発のため、教員に銃を持たせ訓練を計画。武器産業にとって世界平和こそ最大の障害。移民・難民侵入防止のため隔壁建設。絶対的必要性から設立された筈のEUを、保護主義で英国は離脱。中国の一人っ子政策。強制移住。知的財産権の侵害。韓国は外国の歴史的弱点追及の外交政策。北朝鮮では一党独裁。首脳維持のため肉親を次々殺害。餓死者300万人とか。シリアでは政府軍が国民を爆撃。日本でも水銀等公害。原発事故で放射能汚染。政府の莫大な借金。サイバー攻撃。食糧自給率39%。不可欠の自衛隊を憲法違反と騒ぐ。

こんな事で、何が文明進化か？ 今の時代の人々が未来を考えず、地球資源を使い果たしてよい訳がない。40億年続いてきたこれまでの生命の

鎖は、永劫に継続させる義務がある。子孫の繁栄を妨害するような現代社会の在り方は嚴重に反省すべきである。自国の利益優先で、経済発展のみに力を注ぎ過ぎれば、バランスの取れた国際協調が乱れる。その為世界の至る所で、戦争或いは、それに近い状態に陥っている。

700万年続いた人類の歴史も、こんな偽文明の積み重ねでは、あと1万年持たない……という学者もいる。ついには、子孫が真に住みにくくなり、いよいよもって、地球脱出を本気で考えざるを得ない……等、絶対にあつてはならない。

トランプ大統領の「地球温暖化」は偽科学のデッチアゲと決めつける暴言に、ホトホト呆れる。トランプ様よ、明けの（宵の）明星・ビーナスと讃えられる「金星」の大气が、実は90気圧でCO₂が96・5%もある。その為、温室効果で表面温度が、46・4℃の灼熱地獄である事をご存知か？温暖化が進めば地球も金星の二の舞の地獄沙汰になる事を？

産業革命以来、地球表面温度は確実に上昇が続けている。低地は水没し、サンゴは死に、熱帯の動植物は温帯にまで伸びてきた。そして最も恐るべきマラリアやエボラ出血熱など、最悪の熱帯病が、温帯地方に広がりつつある。

*

今、全世界の軽薄な行動。それは生活に便利なものなら、何でも特許を取って大量生産・薄利多売。更に秘境にまで分け入って探検や動植物・鉱物採集を行い過ぎ、絶滅危惧種は増えるばかり。博物館用に教育のための標本採集なら、やむを得ないが、貴重な資源をあさり過ぎ、金儲けのために、がめつく盗掘や採集を繰り返す。あまりにも短絡的で、利己的過ぎないかと愁眉の極み。その

うち、絶滅危惧種の筆頭は、人類そのもの……の可能性も……。

密林の奥地にまで踏み込み、それまでおとなしくしていた野生動物寄生の細菌・ウイルス・寄生虫などを文明社会に持ち出す。それが突然暴れ出す。未知の世界の微生物を、薬品など何らかに役立てようとする態度は大切ではあるが、実験室から漏れ出し、突然変異を起こし、重大な感染源となる事がある。会社や個人の私利私欲のために、要らざる所に深入りして、危険なものを文明社会に広める。エイズが典型例。人類の浅ましき行動に腹が立つ。抗生物質の多用により、耐性菌が蔓延し、ニッチもサッチもいなくなる未来が見え見えである。

*

さて、どこの国の領海にも属さない北極海底底は、鉱物・液化天然ガスなど無限に埋蔵されている。中国は早速、国旗を海底に沈め、ここは将来中国が発掘する権利を持つ……と、世界に宣言している。また地球温暖化により、北極海は解氷傾向のため、欧州への北極航路を狙い「北極政策白書」により、「二帯一路」と結びつけ、権益拡大を狙っている。更に北極海どころか、月面さえも鉱物資源採掘の権利を主張している。尖閣諸島や南支那海の島々の所有権主張どころか、そのうち、地球全体、月も火星も、みんな俺のものだ……と言い出すかもしれない。どうしてこんなに、欲が深いのだろう。人口が増え過ぎ、生存競争のなれの果てなのか？

史上、栄え過ぎた帝国は皆滅びた。人口が増えすぎ、燃料や建築のため森林を切りつくす。すると水源を失い人が住めなくなる。奢れる者久しからず。歴史はハッキリ証明している。

物を造ればゴミが出る。多くのエネルギーも消費する。今、世界の海底は化学繊維やプラスチックの微細なゴミで埋め尽くされ、生態系を著しく乱している。なにが文明の進化なのか？

宇宙でも、使用済み衛星やロケットの破片が弾丸の速度で無尽蔵に飛び交っている。これら宇宙ゴミが、観測者を乗せた人工衛星に衝突しようものなら、とんでもない事故につながる。

原発は資源小国の日本にとつて安価で貴重な電源だが、その副産物がただならぬ厄介者。ケチつてセキュリティを省けば、どれくらい大事件に発展する。政府は電源の22%（原発30基再稼働）を原発に委ねようとしているが、地震大国日本列島で、本当に安全が保証できるのか？ 東日本大震災も、地震と津波だけなら復興も何とかなりそうだが、放射能汚染は何とも厄介である。質（たち）が悪すぎる。

永年住み慣れた郷里を失った多くの人々。何の因果でこんな酷い目に合わなきゃならないのかと、恨み骨髓……であろう。家族はバラバラ。職場喪失。子供も無理やり転校。高齢者は、転居で環境になじめず、死を早める。少しばかりの補償金で解決できる問題ではない。大自然の災害は、常に想定外の演出をする。

更にもし、航空機事故や、極端に言えばミサイル攻撃などで原発が狙われたら、言語に絶する事態が発生しうる。これほど危険極まりない「品物」ならば、どんな必要性があるうとも、断じて最初から作らなければいけないだけの話。生活や経済に便利だからと言って、すぐ何かを造り出すのは、決して文明進化でも何でも無い。これを称して私は「偽（にせ）文明」と言いたい。

*

◎SF想定その1..

ある大国の帝王が、不老長寿の薬を求めて、家臣を旅に出させた。いくら探しても、そんなものがある訳もない。そこで家臣は、考えた。『そうだ、自分で作ればよい!』

私がその家臣であつたとしたら、人間が自然の理に反して、無謀な欲望を起こす頭脳の働きを起さないような薬を發明し、それを密かに殿に飲ませる。そして全人類にも服用させる。そうすれば、人類の無謀な欲望は抑えられるに違いない。平和到来間違いなし。

具体的には、人体に寄生して殆ど害をなさない「サイトメガロウイルス」のゲノムに、非常に穏健で、紳士的な人の性格を決定づけている「遺伝子」を抜き出し、組み込ませる。次に、穏健遺伝子を組み込んだサイトメガロウイルスを、培養・増殖させて、巷に撒き散らす。これで、世の中は平和満開。それほど困難な技術ではない。DNAの継ぎ接ぎは、もはや農業分野ではいくらでも応用済みのテクニクである。ただ問題なのは、倫理的にそれを実行してよいかどうかの話だけである。こうすれば子孫が生存しにくいような環境汚染も防がれる。進化速度は緩やかになり、世界は平和に向かつて、徐々に進行するに違いない。後世の子孫から、さすが21世紀のご先祖は、先見の明があり、賢明な選択をしてくれた!と、感謝されるに違いない。

*

◎SF想定その2..

地上の全てを監視できる「統括人工衛星」を国連が打ち上げる。人道に反する行動があれば、ミリ単位の動きでも人工衛星はキャッチでき、その行動を機械的にストップさせる。例えば銃弾でも

ミサイルでも、もし発射する者があれば、必ずその弾頭は空中でUターンさせ、発射元に戻す。規模が大きければ大きいだけ自分へのダメージが大きくなる。アボリジニのブーメランの原理で、無法な武器使用は必ず己を攻撃する事になる。天に向かつて唾すれば己が身に帰る。

この原理を思いついた源は、私がある社団法人の専務理事をしていた時に、国が推奨する「社団法人経理ソフト」なるものが存在し、その原理に反した、間違いや、或いは悪意の下心で、ごまかしの経理をしようとすれば、ソフトは稼働しなくなる。絶対に悪事はできないようになってる。監査も非常に簡単。経理担当者も専務も安心して、法人運営ができる。「統括人工衛星」さえあれば、この世から犯罪や戦争はなくなる。神の絶対的監視機構である。

*

こんな甘い事をクダクダ述べてるようでは、菅原も認知症が大分進んでいるな!と思うかもしれないが、どんな改革もまず自由な発想の展開から始まる。無限大のスタートはゼロである。

そもそも人類という動物は、私が理想とするような、穏健で、紳士的な生き物であつたなら、今日まで、生き延びられる訳がない。鉤爪や角や牙などの生来の武器がある訳でなし。さりとて素早い脚があるわけでもなし。賢く頭を回転させたから、あらゆる困難に打ち勝って生き延びられたのである。猛獣だらけのアフリカで誕生し、樹木の少ないサバンナで、強烈な紫外線を黒色肌でカットし、長い旅路を踏破し、それぞれの地に定着するまで、言語に絶する困難であつたはず。その「遙かなる旅路」を讃えたいから、これまで懸命に書き続けてきた。

人間のずる賢い行動を軽々に非難する訳にはいかない。これが人間の本性だと今は思っている。ガキみたいな正義感だけで、生き物は生きていけない。生物は托卵・保護色・だましの擬態など、いくらでも敵を欺く方法で生存率を上げている。人間の詐欺行為も、褒める訳にはいかないが、生き抜くために変色して、周りに溶け込む昆虫と大して差はなからう。

*

10年前この会に入り、物を書き始めた頃は、人間の醜い行動を、心底非難する文章を書き続けてきた。青二才の正義感とでもいうのであろうか。

世界中に見られる自己中心の利己主義に無性に腹が立った。しかし、人類に普遍的な詐欺まがいの行動が、本当に悪い事なのであろうかと最近考えるようになってきた。厳しい環境を生き抜くために、やむを得ず獲得した人間の習性なのかもしれない。今まで何度も書いた「ポトルネック効果」で、人口が急減した時、生き残った人々に由来した遺伝子が、子孫に集約して受け継がれる。とするなら、穏健な遺伝子は生存競争に打ち勝てるはずもない。結果は人を押しつけても生き残ろうとした、利己的な遺伝子に支配される「ずる賢い」くらいの人が、すっかり子孫を残した!と考えるのが妥当であらう。

歳をとるに従い、人間の醜い行動・詐欺まがいの利己主義を、ストレートに非難する気にはならなくなった。色々な野生生物の生き抜くための進化の過程を見ると、他人を出し抜く、エサを横取りするなど、ごく当たり前に行われている現象である。そういう事をやつのけるからこそ、その個体は生存でき、子孫を残す事もできた。謙譲の美德だけでは生き残れない。

人間の本性とは、どちらかと言えば醜いもの。「性善説」は理想ではあるが、現実的ではない。本来は「性悪説」が本道なのかもしれない。世の中に美しい事、心ほのかなニュースは少なく、人を欺く薄汚い、甚だしければ殺人などのニュースが多すぎる。これが現実の世の中らしい。悲しいかな認めざるを得ない。それではまずいからこそ、改めて道徳教育を行う必要が生じてくる。正義に満ちた聖なる社会を心の奥では切望している。人類が万物の霊長と呼ばれたのなら、モラルの確立以外に、真の平和はない。

＊

折角膨らんだ大脳をフルに活用して、純粹の科学を進化させるのなら大いに結構だが、ややもすると、すぐ産業と結びつき、いやそれどころか武器産業と結びつき、兵器が威力拡大する事は真に困ったものである。偽文明の典型だ。

画家は、この世を美しいもので満たされる夢を見るから、現実よりも、なお美しく描き続け、文学や映画など芸能関係も、より美しい姿を懸命に描写する。醜い現実を忘れ、甘美の世界に酔いしれたのが本心であろう。

目先の小さな利益など、もうたくさんだ。そんな事よりも、不合理な仕打ちに合わない方がはるかにうれしい。文明の進化速度はもつとゆつくりで良い。何かに取り憑かれてるみたいに、世界が我先にと、何か新しい物造りを競争しているみたいだ。その結果が母なる地球の無残な汚染を招く。何をやろうと環境を汚染しないなら我慢できるが、止めどもなく自然環境を汚染・破壊して、何が万物の霊長ですか？

未来の子孫に、21世紀の先祖達の明晰な決断が、今日の我々人類の繁栄の基礎になっている……と言

われるように、世界中の皆が心掛けたいものである。今からでも遅くはない。命溢れるこの麗しき地球を、全人類が、何が何でも護り抜く重大な覚悟が必要である。

【風の談話室】

《読者投稿》

やささと暮らし15

さと女

今年の天候はおかしい、春は何処に、寒かったり、暑かったり、桜は駆け足で。

●竹細工の師匠

低気圧の発達で彼方此方から雪の便り、薪ストーブは掃除をしたばかり、囲炉裏も片付けてしまった。今日は竹細工の日、休めば他の2人に後れをとってしまう。師匠の所には、懐かしいダルマストーブがアカアカと燃え、冷たい雨の中でも暖かく、箆造りと竹のあぶら取りを教わる。

別の日、竹ひご作りを中心に。師匠の思いが届かず皆やる気なし（なかなか難しいので、それでも根気よく、繰り返し教えてくれる。そろそろ本気出さないと、皆思い始めた。また別の日、結構な雨降りの中、朝早く出かける。途中仲間を乗せて工房へ、2人で道中の景色に感嘆の声を上げた、こういう時間を共有できるのは嬉しい。遠くに山々が幾重にも重り霞んで薄ぼんやりと見え、工房に着くと前回希望していた小鉢籠の準備が出来ていた。師匠に頼んでおいた竹細工の本も届いていた。最近女性竹細工作家が活躍しており、この本も長野の方で頑張っている方が著作。近隣ではつくばのHさん、行方のSさんの活躍を耳にする、

若い女性たちの今後が楽しみですね。

●多くの方から季節の恵を

こごみを竹細工の師匠からいただき、シイタケを知人から、高菜の漬物はお隣から、ふきとみつばは畑から、タラの芽は夫が散歩時に見つけて、なんと、なんと、ありがたい事に山菜が満載。タラの芽の天ぷら、高菜チャーハン、露の佃煮、タケノコの味噌汁、こごみの胡麻和え、感謝感謝ありがとうございます。

今日から4月、一斉に花が咲きほこり、朝から心ウキウキです。今朝も大地の恵みタラの芽を分けて貰いました。感謝しながら頂きます。

今年はこの時期ずっとお天気が続いています、昨年は違いました。来る日も来る日も雨でした。それでもサクラは咲きました。雨でもじつとしていられない私は小雨降る中、風土記の丘に行きました。そこで事件が。石の階段で、スッテンコロリ（石には長雨で苔が生えていたと、見事手首の骨折、桜の季節の苦い思い出です。

強風が吹いたと思ったら、今度は寒さが（花冷えですか？）気圧の所為もあり、頭がスッキリしない。暖かい時咲いていたチュウリップも堅く閉じてしまった。コロちゃんもひたすら小屋の中で丸まっている。昼の散歩は無理やり連れだし、畑を散歩。ご近所さんは田んぼの準備、畦の修復やら、苗箱に種を蒔いたりしていた。4月末からはもう田植えが始まります。季節はどんどん移り替わって行きます。先日の雨でタケノコがよきによきと、夫が汗を流して掘って、かまどであく抜きしてくれました。朝の散歩から戻った夫、得意げにポケットから、ほら！と、何と、タラの芽だった。山菜の王様、タラの芽、付け根のハカマをとって早

速天ぷらにして頂いた。ほのかな苦みを感じながら、満開の桜を思いながら、もう、4月かと季節の移ろいの早さを感じた。

●春は花盛り

私の体調はどうもお天気に左右されるらしい、花冷えのスッキリしない日は必ず頭重感に襲われる。頭の中はいっぱいに雲がかかったようである。力が無くなる。ところが、晴れわたっていた昨日は、起きると頭の中の雲が消えていた。やはり天気と頭痛関連あるのかな？ 庭のチュウリップもぱつちりと、春だよネ。

散歩の途中、ヒュウガミズキが咲いていた。丸みのある黄白色の小さな花、柔らかな葉っぱ、薄い黄緑がフワフワな感じ、こんな優しい気持ちになれたらなあ〜！

畑一面の黄色が目にはいる。何かと思いついて見ると、タンポポの群生だった。タンポポってこんなに遅かったのか？と思いつつ、遠い昔に歌ったことがあるような歌詞などが思い浮かんだ（雨にも風にも負けないタンポポ、大空いっぱい綿帽子飛ばせ、見知らぬ大地に新しい花咲かそう）（野原に咲いた花だからどんな花よりタンポポの花をあなたに贈りましょう）遠い記憶が…。

今は山々の色が日々変わり、農家の人々も気忙しく働いています。梨農家の知人は予想外の開花の早さで受粉に大忙しです。私は散歩の途中寄ってくれた花友だちとよもやま話、庭はツツジが咲き始めドウダンツツジ、ヒメシヤガ、ハナミズキも満開、話はつきません。

●今年の桜は早い。そしてもう終わった。

坂道を昇って行くと別世界。豊後荘病院のサク

ラが咲いていた。丘の下を見下ろすとそこにもサクラが、ヤギさんもいますよ。ドライブがてら見に来てください。恒例、羊肉レストラン“ひつじの郷”でのお花見、夜桜バーベキュー。ライトアップされた満開の桜は、テラスの方にも枝が伸び、私達を歓迎してくれた。羊の肉でのバーベキューとお喋りを堪能した帰り、駒村清明堂”さんの石割桜を見学、巨岩を真つ二つに割って成長した山桜。どれ程の年月が建っているのか。こちらもライトアップされ仰ぎ見た桜の先にはまんまるの朧月が、そして足元の池には桜が映し出されています。何とも贅沢な夜でした。

心を弾ませた桜がアツという間に終わった。今年はずりわけ奇麗だったので、オーバーに言うたあれは夢の世界だったのではと思うほどでした。

ソメイヨシノは散ってしまったが、今度は枝垂れ桜が見ごろ、ふんわり、やわらかな枝垂桜のトンネルを歩く。枝が風にしなやかに揺れ、ハラハラ花びらが舞い、何と、美しい事、言葉にならない。

県立こころの医療センターの桜まつり、桜はすっかり散って葉桜になっていたが、まつりの為の炊き出しに出かける。患者さん、ご家族の方、医療関係の方、地域の皆様方に喜んでいただけよう、ボランティアとして参加。何しろ500人分を用意してふるまうのですから、量も半端でない。すべて手作り、でも7回目ともなると手慣れたもの、トン汁、きんぴら、赤飯など、次から次へと炊き上がる。舞台上の太鼓やダンスを見ながら、食べながら楽しんで貰った。皆さん其々、おいしい！と、非日常の春のイベント、患者さんの喜ぶ顔が見られてボランティアさんも笑顔に。

●お彼岸、墓参り、おおやまさくら

両親の墓参りに部落の共同墓地に、98歳と94歳よく頑張ったね、とお参りを。帰り道麦畑が目に入り2人が麦踏をしている姿など思い浮かんだ。お隣のおばあちゃん、早くみんなの所へ行きたいよ、と言っていた。龍神山の山肌に沿って建つ霊園。霊園に向かう道中は桜並木、満開の桜もハラハラ散り始めていました。先日完成した友人のお墓を見学。主の気持ちのこもった墓でした。墓地の景観も市内を一望できスバラシイ。霊園を背に桜並木を眺めながら、ピクニックのようなお昼でした。お腹を満たしたあとは森林浴をしながら近くの佐志能神社へ、急斜面を登っていくと巨岩がゴロゴロ、登り切った所の巨岩の上に神社がありお参りを。

友人6人でbookcat えんじゅへ。子供もじいちゃんも婆ちゃんも同じ空間で一緒に時間を過ごす。思わず自分の子育ての頃を思い出した。久し振りに子供の声を聞いたような気がする。何ともホッとする感じを味わった。和菓子とお抹茶を頂いた後、N氏の案内で大山桜を見に、樹齢250年と言われる桜は見ごろは過ぎていた。やはり今年は桜の開花が早かった。山道には二輪草の群生地や山吹など咲きほこり山野草などの説明を聞きながら歩いた。楽しい時間を有難うございました。

●友人のお見舞いに

旧友が10日程の入院、手術を終えて退院したとの電話を貰った。「何を食べてるの」と聞くと「おかゆだよ」との返事。何かお見舞いに良いものがないか。笠間の豆腐屋さんを想い出した。早速出掛け、出来立ての豆腐、厚揚げ、がんも、ゆば等を宅配で送る。帰りの道中、道沿いの若葉が、や

たら目に入った。花も良いけど、柔らかな、新芽にも感動させられます。

あれ！山がいつもの景色と違う。隣の部落、山崎。山肌がむき出しになっている。下には人家がある。新たに植林するなら良いが、なんか心配だな。でも心配しても仕方がない。が、やはり気になるなあ。

●コンサート、イベント、諸々

恒例のまんまやコンサート（おそばさん）。今回は山本太郎のクラリネット、山田よしおのギター、ジャズボーカリスト愛田美樹でタップリ2時間。懐かしの映画音楽やら癒しの歌声を満喫した。黄昏時から始まったコンサート、店内はお客でいっぱい、開演前にマスターの心のこもった麦とろを頂き、和やかな雰囲気の中楽しませてもらいました。

昼食はオリーブさんで生演奏を聴きながらのランチコンサート。先日病院でドラムのSさんに会う、持病の具合が悪く入院していた事を聞き心配していた。今日は元気に復活し、ドラムを叩いてくれた。このSさんは、且つて「石原裕次郎や浜崎あゆみ」のバックバンドをしていた事もあり、時々懐かしそうに当時の話をしてくれる。今回もみんな元気で良かったねと口々に。オリーブさんの庭は新緑まっさかり、ウワミズさくらも咲いていました。

友人からオモシロイ映画あるよ、今日までだよと連絡をもらい、早速柏まで出かけた。映画はアスベストの国家賠償訴訟を8年間密着取材したドキュメンタリー。間に休憩を入れた3時間半にわたるものだった。長い闘いが最高裁で勝利するが、その間も原告の方達はどんどん亡くなって行く。

重たい題材だったが、原告団が陳情書を持って国会内に入って行く場面など、喜劇映画を見ている様な場面もあった。でも、未だに呼吸困難で苦しんでいる人が多数、一体何人の人が肺がんなどで亡くなったか把握されてないという。大変考えさせられるドキュメンタリー映画だった。

お天気と新緑にさそわれて、辻イチゴ団地を訪れた。家族づれなどのいちご狩りで賑わっていた。知人のいちごやはクローズされていたので、近くのベジグリーンに行く。月1回のサービスマンで、混ぜご飯の振る舞いがあった。先着者へのサービスマンで、買い物したらジャガイモ1箱と、沢山のりんごのサービスがあった。その

あと朝日里山のウリボーでコーヒーを飲みながら地域協力隊の方と話が出来た。帰り際は志村陶房に寄った。筈間の陶炎祭も近く出店準備に忙しそうだった。ジャガイモやリンゴをお裾分けし、少しは励ましになったかな？色々話をしていると、翌日朝日里山で陶芸教室（障害のある方たち）がありバス1台で来る、と言うはなし。車椅子の世話もあり大変と聞き手伝うことにした。そして夜は“ひつじの郷”でディナーコンサート、クラリネットとギターの弾き語り、懐かしいフォークソングの世界を楽しみ一日が過ぎた。

朝日里山学校、新緑の山々に囲まれた、旧小学校。昨日は水戸近くのグループホームの入居者の皆さまと職員の皆さまがワンボックスカー4台でやって来ました。教室で校長先生（入居者）のお話、出席をとり一時限目の授業が始まりました。一時限目は陶芸教室、先生は、八郷で工房を開いている志村先生、私は先生の助手、雑用係でした。皆様其々カップやお皿、見事に作られ大喜びでした。給食は里山の方達の作ってくれたカレーとピザ。

皆様八郷で楽しい時間を送られ帰って行きました。マルシェへ。朝からあいにくのお天気、ひつじの郷で、昨年からは2回やっているマルシェの日、雨、風で中止かと思いついて見ると車がいっぱい、3階のロフトまで出店者の様々な手芸品が並んでいた。見てしまうとみんな欲しくなってしまうがグット我慢、リバーシブルの帽子など数点買って、会場で一緒になった駒村ご夫妻とコーヒータムとなった。ログのある峠から見る山々は雨にけぶって美しさが増していた。

義兄の形見に貰った着物、体の大きい夫には着られないので、知人に作務衣にリホームして貰うことにした。

ほどうして洗ってアイロンをかけて持って行った。暫くして知人が、作務衣の縫い代の代りに着物をほどうして貰えない？と、いうわけで、此の所暇さえあれば着物解き、着物はネットオークションで買ったもので、手芸に使うらしい。触っているだけで気持がいい布地、どんな人が着ていて、これらが何に変わるのか想像しながらほづく。3枚目がやっとほどこき終わった。

友人から頂いた苗木、1本目は根付かず、2本目は小さいながら根付く、喜んだのも束の間、苗木の真上に800ℓのタンクがドンと置かれていた。水が満タンに入っていて動かない。苗木の事はあきらめていたら、何と？タンクの下からつんと枝がのび、蕾がついた。諦めていた黒花蠟梅だった。チョコレート色の丸い花。それにしてもたくましい。タンクの下からよく頑張って地上に出て来たね！

《風の呟き》

諸悪の根源→人口過剰

菅原茂美

日本では少子化が問題だというのに、人口過剰の話題はピント外れのように聞こえるかもしれない。しかし世界を見渡せば、地球の人口収容能力は、50億人と言われるのに毎年8500万人ずつ増えており、今やすでに75億人に達したと思われる。今世紀末には確実に100億人。いかなる世界情勢が展開している事やら…。

概して言えば先進国では、人口減少気味であり、発展途上国では、猛烈な勢いで増え続けている。ここで問題となるのは、少しでも生活の向上を目指して、途上国から先進国へ、難民・移民が猛烈な勢いで流れているという事だ。国境にどんなバリケードを築こうが、高い塀を設置しようが、そんな事はものともしない。水が高い所から低い所へ流れる原理で、ちとやそつとの障壁は、乗り越える。先進国も人口密度が希薄なうちは、容易に受け入れるが、経済的にもひっ迫してきて、人口もある程度に達すると、そう簡単に受け入れる事はできなくなる。先進国も新たな移入者の福利厚生まで面倒見切れなくなる。そこで純潔を重んじ、国粋主義や保護主義が台頭し、国際情勢はギクシヤクしてくる。

私が国際協力事業で赴任した中米のある国では、国内産業が少なく職場もあまりない。大の男がぶらりぶらり。奥様達は、子供は欲しいが、亭主はいられないという。子供は靴磨きや新聞配達・物売り等結構仕事はあり、母親の助けになる。そこで亭主はアメリカなどへ出稼ぎに…。最初は送金してくるが、その内、どこでどうしている事やら音信不通。行方不明となる。従って母子家庭が非常

に多くなる。パイナップル・バナナ・コーヒーなどアメリカ資本で大きな農場はあるが、利益のほとんどはアメリカが持つていく。国民は相変わらず超貧乏。国営発電所は燃料が十分買えず停電ばかり。偏見かも知れないが、アメリカの戦略で、貧乏な隣国同士が仲たがいをさせられ、米軍の古い兵器を高く売りつけられる。空には毎日、戦闘機がブーン飛んでいるのに、国民は毎日の生活が成り立たない。小学校義務教育6年さえまともに卒業できない。年収(ほぼ7万円)全部注ぎ込んで、テレビ1台買えない。こんな世の中、一体どうなってるのか？ 国連は出資金の多い国優先にしか、対応しないのか。何のための国連か？

狼はエサが少なければペアリングは順位1位の雄雌1組だけ。他は交尾が許されない。生殖秩序は厳重。しかし人間は食糧があるうがなろうが、ひたすら子作りに励む。過剰人口になると、何とかして生き抜こうとして、あらゆる手段を考え出す。どうにも行き詰まれば戦争に訴えるほかなくなる。人類の歴史上、戦争のなかった時代などあるだろうか？ なんと哀れな生物種である。国連は、上品な事のみ唱えて、先進国の言いなりではなく、全世界を見渡した公平な、真の世界平和のために全力を尽くすべきである。世界を統一し、差別をなくする事が第一。いい加減、国境などという変な線を越えて、すべての人間が生命と財産を保証され、自由を謳歌できる世界に発展すべきである。人口コントロールができ、社会秩序がきちんと守られてこそ、人類は万物の霊長と言える。

喪失の記憶

打田昇三

「すまじきものは宮仕え」と言う諺があるように組織社会では良い上司に出会った場合と、そうで無い場合との差が大きい。かつて文芸評論家として活躍された白井吉見さんの「日本語と日本文学」という講演を聞いた中で其のことに触れた部分が有ったのを思い出したので紹介しておく。

講演の趣旨は「…日本語は意味が曖昧で暗示的である—だからこそ源氏物語・徒然草・和歌・俳句など感覚に優れた文学が生まれた…」とする内容だが、其の中で学徒動員により陸軍少尉として南方戦線に送られた白井さんの、活躍と言うよりも失敗談に近いエピソードが披露された。

軍隊では指揮官の統率方針が示される。部下は是に異議を唱えられない。ところが本来は文学専攻学生の白井少尉は、部隊長が示した統率方針の「積極的任務の遂行」と言うのが気に入らない。南方戦線でも未だ日本軍優勢の頃であったから或る日のこと、下級将校だけの集まりで少し酒も出た際に白井少尉は部隊長統率方針に文句をつけた「積極的任務の遂行」と言う言葉はおかしい！任務の積極的な遂行ではないか？」と。

上層部には知れない筈であったが、是が部隊長の耳に入ってしまった。同僚から忠告された白井少尉は後悔しても既に遅い。…早速に呼び出しが掛かった。恐る恐る將軍の御前に伺うと、此の人が出来た人物で「成るほど、君の言う通りだ。統率方針を直そう…」と言ってくれたのである。

そのことがあって、白井少尉は部隊長付き将校に抜擢されたと言うが、是が逆に作用していたら翌日には最前線に飛ばされたかも…

時代は遡るが、ツイテ居ない主人・源義経の為

「龍（Ryu）」の創作メモより

白井啓治

に「任務の積極的遂行」に努めた挙句、奥州衣川の合戦で全身に矢を受け、針鼠の様な姿で立ち往生をしたのは武蔵坊弁慶である。その上に石岡の伝説「常陸国文寺の雄鐘、雌鐘（霞ヶ浦の沈鐘）」では釣鐘を運び出したのが大力の盜賊か、弁慶か？と疑われており、石岡駅のホームにモザイク画で残されてしまったから濡れ衣を晴らすのは容易ではないが流石に「歴史の里」であり、弁慶の無実を証明する為に、国分寺の鐘が無くなった事件の真相を「石岡市史」に残している。

其れに依れば国分寺の鐘は江戸時代まで在ったようで、元和九年（1623）に一万石で藩主となった皆川氏（信濃・飯山から転封・三代將軍付）が恋瀬川改修工事で作業の合図用に使い、其れを放置して返さなかった為に盗まれたらしい。盗んだ者も運ぶのに苦労したと思うが、借りた物を返さなかった奴は論外で皆川家は程無く断絶する。それも後継者が相続をしてから二週間で死亡したらしいから、国分寺の鐘の祟りと言う他は無い。

話は変わり、私はドイツが東西に分断されていた時期にベルリンなどを訪れているが、明治二十年頃に留学中の森鷗外が住んでいた東地区のアパートが完全に復元され史跡として扱われているのに驚いた。其れに比べて千年の歴史を持つ国分寺の鐘が紛失しても全く無関心であつたらう昔の茨城県人の度胸の良さに感嘆したものである。

石岡は「歴史の里」と言われる。日本六十余州の中で最上とされた国の都が置かれたのが石岡なのである。近年は其れを確かめるに來る観光客も多い様だが、古い物が無いので説得力を欠くのは残念に思われる。復元でも良いから、古代石岡を証明する何かが有って欲しい願っている。

7月16日（月・海の日）に、当風の会12周年記念祭・第二弾として、ふるさと風劇団ことば座の公演が、ふれあいの里石岡・ひまわりの館で行われる。ことば座の挑戦する常世の国の恋物語百も今回で38話となる。

常世の国の恋物語百は、石岡市を基点とした周辺地域の伝承物語や名所・旧跡などをモチーフに物語を創作し、手話舞を基軸とした舞台表現である。

ことば座の展開する手話舞とは、朗読を主旋律とした手話の舞であるが、手話舞に表現する手話は、健聴者の為に造られた現代手話ではなく、現代手話の考案される以前から、聾者の方たちに用いられてきた、所謂「聾語」と説明づけられる手話をもとに振り付けされる舞である。現在この手話舞を演じられるのは、ことば座の聾女優小林幸枝さん一人である。

小林幸枝の舞う手話舞について、元東日本国際大学学長の吉野公喜氏は、「朗読手話舞にみる音声言語と手話のもつ世界（手話言語）とのコラボレーションは、意味深い言語学的哲理を秘めている。言語表現における表層と深層の構造的成り立ちを否応なく意識させてくれる」と評価されている。

また縄文語の研究者である鈴木健氏は、小林の舞う万葉集「筑波嶺に雪かもふらる…」を見て、小林さんの雪の表現は、漢字の「雪」の成り立ちがそのままである、と著書に書かれている。

恋物語創作メモの前置きにしては長くなったが、ことば座の行っている「手話舞」について少し説明させていだいた。

さて、ことば座の展開している創作劇「常世の国の恋物語百」は、ふるさと風の会12周年記念祭の公演で、三十八話となるのであるが、今回は石岡市にとってシンボリックな龍神山をテーマに龍の話しを演じてみたいと思っている。

龍神山の龍をモチーフにした恋物語は、これまでに四作品書き下ろし、上演しており、今度が五作品目であるが、これが龍神山最後の物語になるかなと思っている。

石岡の伝説物語では、直接龍に関係したものとしては、「柏原の池」が残されてあるだけである。しかし、その物語を知る人は少なく、またそれを語り伝える人は殆どいない。

龍神山も、古くは村上山と呼ばれていたのであるが、何時頃から龍神山と呼ばれるようになったのかは、検証された資料もない。龍神山を、常陸国風土記に記されている「輔時臥山（くれふしやま）」とする説も言われているが、これも検証されていない。輔時臥山には、大神（蛇）を産んだ奴賀比売（ぬかひめ）の伝説があり、片岡には比売が盆（ひらか）を投げつけ自分の産んだ蛇を殺し、葬ったという蛇塚もあるが、語られることはない。

今回、書き下ろす「龍（Ryu）」は、龍神山の龍を物語にするのではなく、古今東西に伝えられている「龍&ドラゴン」の存在にスポットを当てて、常世の国の恋物語第四話に書いた「風貴（ふき）」を再登場させながら、龍の話しをしてみたいと思っている。

当会報は、今月号で満十二年が終わる。干支の十二が終わり、二週目に入る。干支と言えば、十二の動物が当てられているが、辰（竜）だけが架空の動物である。何故架空の竜が入ったのかはここでは考えるものではないが、不思議である。

架空の動物？ 龍が日本に入ってきたのは中国を渡ったようであるが、その始まりはインドだと言われている。龍の姿には、羽の有るものと無いものがあるが、西洋のドラゴンと呼ばれる龍には羽がない。

龍のモデルとなったのは、鰐と蛇と言われているが、そのルーツはむしろ恐竜にあるのではないだろうか。龍が創造されたころには、恐竜は絶滅しているのであるが、龍の容姿は恐竜に似ていると言える。見たこともない姿を発想した原点には、恐竜期に生息していた哺乳類の祖先のDNAの中にその姿が記録されていたのかもしれない。それではなければ東西に渡って同様な姿の龍が描かれるはずもないだろうと思うのだが、面白い謎である。さらに興味の惹かれることは、非常に恐ろしい姿ではあるが極悪非道な性格ではなく、宇宙の何処からか遣わされてきた神があった存在であることである。

物語作家としては、実に興味のそそられる存在ではある。龍の持つ、あるいは放つ恐怖とは、人間の姑息な思考の首を討つような恐怖であると言える。

龍の創造の元は立ち上る炎だと主張する者や、農耕民となった人間の天敵である毒蛇だという説を唱える者もいる。しかし、その顔つきと創造の発祥地と言われるインドを考え、鰐が有力説になっているようだ。

世界中に龍に関する伝説が存在するが、いずれの龍も神がかり的な神秘性を持っているのが、面白いというか興味がそそられる。

さて、今回書き下ろす龍の物語は、龍とは何かをテーマに恋物語を構築してみたいと考える。龍とは：

龍は、三億光年先の龍星に棲む生き物。龍は、時空間の概念を捨て、自在にコントロールする力を備えた生物である。時空間の概念を捨てた龍には、三次元としての物体の概念も捨て、その姿を地球に見ることはできない。地球と言う星に見ることの出来る龍の姿は、伸びては消える炎のような瞬間的造形であることから、閃光する光に瞬間する影を見たものは、紅蓮の炎の舌のようなものを想像し、それから全体の姿を空想したに過ぎない。

瞬間的に時空を超えて地球にやって来た龍に目的はない。ただ地球の姿を地球の時空の流れに載せて傍観するのみである。

龍には人間のような説明を主とする音声言語は持たない。龍は感じ合うことでコミュニケーションをとる。そのため稀に感性の鋭い人に、龍の心の流れが入り込むことがある。

その龍が言った。言葉を持った人間は、己の姑息を隠すために、言葉に説明と言う概念を持ち込んでしまった。地球の生物で、姑息を持ったのは人間だけだと。

龍の正しい存在は、ごく限られた人たちによって口伝によって伝えられてきた。それらの人は、神仏とは全くかわりのない者たちで、今はもうその口伝する人は殆どいなくなってしまった。

この物語では、この地の最後の龍守りといえる古老の呟きによって語られる。そして、古老の呟きの間に、かつてこの国を救った吉生の里娘「風貴」が、龍の心を代弁して舞を舞う。

さて、本番までに、どんな物語になるやら、作者自身、見えぬ先を楽しみに思っている。

【特別企画】

打田升三の私本・平家物語

巻第八（一・二）

名虎（なとら）のこと

平家物語の悪い癖で何でも昔のことを引き合いに出すため動物園の人気投票のような題名が付いたけれども「名虎」とは、その昔、源氏の祖である清和天皇が皇位を継ぐに至った経緯に登場する相撲大会の勇士の名前である。平家物語に入れないくても良いと思うが、作者は是から登場する源氏へのサービスのつもりで書いたのであろうか？。

寿永二年八月十日、後白河法皇の御殿において叙位叙勲が行われ木曾義仲は左馬頭（さまのかみ）馬寮の長官、從五位に任官して領地に越後国を与えられ、十郎行家は備後守になったけれども二人共に我儘を言って、義仲は越後でなく伊予国を貰い、行家も備前国に替えて貰った。他に源氏系類の者が十余人ほど諸国の領主、検非違使（司法官廳、衛門府や兵衛府の幹部になった）。

同月十六日、平家一門の官職を持つ者百六十余名が、当然ではあるが免職となり宮中における資格を削られた。その中でも大納言・平時忠、内蔵頭（くらのかみ）・平信基（時忠の従兄弟、讃岐中将時実（時忠の息子）の三人は削られなかったが、それは法皇から平時忠に「安徳天皇と三種の神器を返還するよう…」申し入れてあったからである。しかし平家側が返還の態度を示さないままに同年の八月十七日には、何の肩書も無くなった平家御一行が筑前国三笠郡（現在は太宰府市）に到着した。地元出身の菊地二郎高直は都から平家に従っていた武士で

あるが（主上都落）で肥後守貞能に就いて都に來た。此の時に「大津山（熊本県玉名）の閑所を開けさせて参ります」と言つて肥後国に先發して行つたきり、現在の菊地市に在つた自分の城に籠つて出て來なかつた。

其の為に現地の武士で平家に従つて來たのは岩戸の少卿と呼ばれた大蔵種直だけであり、九州本土と老岐対馬の兵も「其のうちに参ります」と手紙だけは來たのだが、軍勢は未だに到着して居なかつた。平家の一行は太宰府神社に参詣して歌を詠んだり連歌を催したりと神社側に奉仕したけれども味方に着く軍勢が居なければ何の役にも立たないのである。本三位中将こと平重衡が詠んだ。「住みなれし古き都の恋しさは

神も昔に思ひ知るらん」

この歌を聞いて誰もが涙を流したのである。

寿永二年八月二十日、都では後白河法皇の宣命（口頭命令）に依り高倉天皇の四宮（安徳天皇の異母弟である尊成親王が、高倉天皇の里内裏であつた二条大路の閑院殿にて第八十三代・後鳥羽天皇として即位した。天皇の証拠物件である「三種の神器」は、未だ安徳天皇（平家）が抑えていて離さない。幼い天皇を補佐する摂政は前任者の近衛殿こと藤原基通が其の俣で置かれ、天皇側近となる藏人頭（くろうどのとう）や藏人を任命してから退出した。是を聞いた三宮（法皇の面接時に泣いた）の乳母は悔しさに泣き悲しんだけれどもどうなるものでも無い。

「天に二つの日（大陽）無し、国に二人の王無し」と言うが、平家の悪行に依つて京の都と九州の地とで二人の天皇が存在することになってしまった。

さて、是からが表題の「名虎」が登場する話になるのである。その昔、文徳天皇（第五十五代・西暦八五〇～八五八在位）は天安二年八月二十三日に崩御さ

れたのだが、子供が大勢居て（六人の女性に二十九人を生ませた）さぞ、忙しかったとは思ふが、特に男児は皇位に望を掛けて、それぞれが密かに祈禱などをしてゐた。

長男に相当する一の御子は惟高（これたか親王と言ひ通称は「小原の皇子」と呼ばれていた。母親が名家・紀氏の出である。君主の才を持ち政治力が有つた。常に王者の心掛けを身につけていたから皇位に着けば名君になるであろうと噂されていた。次男の惟仁（これひと親王は当時の政治の実権を握る摂政関白・藤原良房（忠仁公）の娘（染殿の后）が母親であつた。藤原一門の公家たちが揃つて後押しをしていたから現代の政治家と同じで、本人はどうでも後援会が強かつた。

原本によると惟高君は帝王学に優れ、惟仁君は優れた参謀が多いと言ふことになる。一度に天皇になれるのは一人であるから（末期平家時代のように別に二人でも良いように思うが）皇位継承で関係者が悩んだ。抽選かテストか人気投票にすれば良いのだが昔は何でも神仏に頼るから、両陣営は有名な僧侶を呼んで祈禱を始めた。

惟高親王方は「柿下の木僧正・信濟（かきもとのきそうじようしんぜい）」と言ふ弘法大師の弟子を頼み、惟仁親王方は母親の祖父（藤原良房）の祈禱僧である比叡山の恵良和尚（えりようかうしやう＝円澄の弟子）を指名した。葬式でも無いのに有名な坊さんが競争で拝み出したから、人々は「何事であらうか」と心配していた。その予感が当たつて、弱りながらも何とか生きていた天皇が死んでしまったから、公家たちが緊急会議を開き、「我々が勝手に天皇を選んでも私情が絡むから、此処は公平な方法で選ぼう。それには競馬か相撲で決めるのが良からう」と、小学生でも思い付かないような馬鹿な事

を思い付いた。

天安二年九月二日、天皇候補の二人の皇子が右近衛府の馬場（現在の北野神社の近く）に設けられた臨時国技館に出てきた。それに皇族やら大臣やら高級公務員たちが付いて來て、噂を聞いた都の者たちも遠巻きに集まつたから忽ち「満員御礼」の札が貼られた。勝負を相撲に託したのであるから両陣営とも強い力士を集めれば済むのに、此処でも御祈禱が優先して信濟も、恵良も土俵とは別な場所ですで熱心に御祈禱をしていた。

大相撲京都場所が開始されたのだがサーブとして最初に競馬の十番競技が行われ惟高親王の馬が四勝、惟仁親王の馬が六勝した。やがて相撲が始まり惟高方から名虎の右兵衛督と言ふ自称六十人力の強そうな力士が登場した。惟仁方からは能雄（よしお）の少将と言ふ余り大きくも無い力士が夢のお告げで現れたと言つて出て來た。

両力士が対戦して大きい名虎が小さい少将をぶら下げ六メートルほど投げ飛ばした。しかし少将は一回転して綺麗に着地し名虎に向かつて行く。どちらも負けて居ないのだが名虎は身体が大きだけ強そうに立ち回る。傍目には少将が少々不利に見える。そこで二の宮惟仁親王の母親である染殿の妃方から頻繁に使者が出されて「形勢不利」が伝えられた。此処から話が「完全な嘘」になるのだが、勝利の祈禱を続けていた恵良和尚が非常手段として独鈷（とっこ＝密教で使う仏具、古代インドの武器が原型）で自分の頭を突き脳髓（のうずい）を出して護摩焚き用材の樹液と混ぜて黒煙を発生させ一心に祈禱をした。煙の中で拝んだから手抜きをしても分からない。その効果で能雄の少将が相撲に勝ち、二の宮の惟仁親王が皇位を継ぐことになった。それが源氏の祖となる清和天皇なのである。天皇

陵が嵯峨の水尾に置かれたので「水穂（みずの）お天皇」とも呼ばれる。

このことから山門（延暦寺）では「恵良が脳髓を砕いて二弟が皇位に就き、尊伊（そんい）十三代の天台座主が智剣を振って菅丞（菅原道真公の霊）を静められた」と伝えており、此の二件を除いては天照大神の神徳とする――実に都合の良い話であるが、科学的根拠は無い。

此の話を西国で伝え聞いた平家は、安徳天皇以外に皇位継承資格のある人物を都に残したことを後悔して「高倉天皇の」三の宮、四の宮まで連れてくるべきであった」と嘆いた。平時忠も「木曾義仲が主と仰いでいる以仁王の遺児（巻第四、通業之沙汰で登場した野依宮）は乳人（めのと）守役の藤原重秀が出家をさせた上で、北国に連れて行ったのであるから源氏は多分、その方を皇位に就けようとするであろう」と心配して言ったのだが、それを否定するように誰かが「それは無いでしょう。一度、仏門に入った方を皇位には就けられない」と明言した。

しかし時忠は「それもそうだが、僧になった者が還俗（げんぞく）僧籍を脱して一般人になる」した例は異国には有る。日本では天武天皇が皇太子の時に大友皇子（天智天皇の子）に遠慮して髪を下ろし吉野の奥に隠棲されたけれども、やがて大友皇子を滅ぼして皇位に就かれた。また孝謙天皇は仏道に入る決心で髪を下ろされ名前を法基尼と申された後に再び皇位について称徳天皇となられた。ましてや木曾義仲が勝手に主に祀り上げた宮が還俗したとしても問題では無いから、そういうこと起こるであらう」と残念そうに言った。

寿永二年九月二日、後白河法皇から伊勢神宮に勅使が立てられた。勅使となったのは参議の藤原

長教（ふじわらのながのり）信西の子）である。天皇では無く、太政天皇（上皇・法皇）から伊勢に勅使が立てられたことは朱雀（六十一代）、白河（七十二代）、鳥羽（七十四代）に例があったが、いずれも出家以前の事である。出家された天皇が勅使を立てられた例が無い――そうは言っても、後白河法皇しか居ないのであるから仕方がない。

緒環（おだまき）のこと

後に源氏の時代になって源頼朝に捕らえられた静御前（義経の愛人）が舞を強要され、其処で歌った歌詞に「おだまき」が出てくる。緒環は単的に言うところの糸巻のことである。日本の神話にも登場するから、呪術的な要素が有るのかも知れない。此の章段は、九州に逃避した平家を追い出すように命じられた緒方三郎という武士の祖先が伝えていた日本各地に残る「蛇神伝説」の話である。

相手が大蛇であるから内容が怪談めいているけれども、都を追われ放浪する集団に成り下がった平家にコワイ話などしている余裕は無い。しかし現実的に希望の無い将来は怪談以上に怖い。平家も段々に可哀そうな立場になってくる。

第二次大戦下の日本国民を先取りして九州に疎開した平家であるが安徳天皇を抱えているので、その辺の寺などに泊まる訳にもいかない。筑紫（つくし）九州北部）に内裏を建造しようとしたのだが良い場所が無いし、さらに平家が捨てて来た京都では既に代わりの天皇が出現している。

放浪中の天皇は、結局は仮住まいで地方官僚の大蔵種直と言う者の屋敷を宿舎とした。人家も稀な場所ですら田や畑が広がっている。「自然が

豊かで良い場所です」と言って誤魔化したのであるけれども新古今集にある式子内親王（安徳天皇の伯母）の歌「更けにけり山の端近く月冴えて十市（といち）の里に衣（ころも）打つ声」のように、衣打つ音は聞こえないと思うが都市部とは離れた辺鄙な山村地帯であることに変りは無い。

しかし内裏（だいり）の代理に充てられた場所は山の中であるから、かつて斎明天皇が天智天皇などを率いて朝鮮半島に遠征しようとして四国まで行き現地に建てた「木の丸（このまる）殿」も此のような場所であつたろうと思われる、なかなか優雅な風情のある建物であると思つた者も居る。

大都会から山里に連れて来られた安徳天皇は、先ず宇佐の八幡宮に参詣した。大宮司の官舎が立派だったので強引に其処を御所に決めて、神宮の本殿や周りの施設には平家一門と一緒に逃げて来た公家などがゴキブリのように勝手に住み付き、回りに四国や九州で平家に召集された兵士たちが集まつたから、八幡宮の神さびた施設が飾り直したように兵士たちの武器で光っていた。

平家一門の主な者は、其処で七日間の参籠をしたのだが、七日目の明け方に前右大臣（宗盛）に神のお告げがあつた。宝殿の戸が自動的に開いて威厳の有る声で「世の中のうさには神も無きものを何祈るらむ心づくしに」――個人的な心配事は神に祈っても無駄なのに、何を其の様に祈るのか？と、神様にしては事務的な返事がした。宗盛は驚き失望しながらも「さりとともと思ふ心も虫の音も弱り果てぬる秋の暮かな」と言う他人の歌を口ずさんで官立の施設が有る太宰府へ移って来た。

九月も十日になって平家の一行は萩の葉を吹き抜ける風の中を、飽く迄も仮の宿で、それぞれの空間を見つけて仮寝する日々が続く、更けゆく秋

の哀れさは何処も同じとは言いながら旅路の空の
厳しさを実感する日々が続いていた。

九月の十三夜は名月として知られているけれど
も平家一門は忍び難い旅の空であるから、誰もが
都を思い出す涙に曇る目で月を眺めていた。都に
居れば思い思いに名月を歌に詠むのであるが当て
の無い旅先で詠む歌は元気がない。呑気に歌など
詠んでいる暇があつたら生き残る対策を考えた方
が良いと思うが、平家一門は先ず歌である。

「月を見しこぞ（去年）の今宵の友のみや

都に我を思い出づらむ（薩摩守忠教）」

「恋しとよこぞの今宵の夜もすがら

ちぎりし人の思ひ出されて（修理大夫経盛）」

「わけて来し野辺の露とも消えずして

思はぬ里の月を見るかな（皇后宮亮経正）」
平家は呑気に歌など詠んでいるが、九州も公家
などの領地になつていたから心配をする者も出て
くる。豊後国（大分県）は、二位で刑部卿（きょうぶき

よう＝法務大臣）の藤原頼資（飛鳥井家の祖）に与えられ
ていた。法を司る法務大臣が自分の領地を管理出
来なくては無能の標本になるから頼資は現地代官

に任命していた息子の頼経に緊急指令を出して
「平家は神にも見放され、朝廷にも捨てられた集
団であり、都にも居られず浪に漂流する落人であ
る。それを九州の者たちが丁重に受け入れている

のは誠に奇怪である。我が領地（豊後）に於いては
平家に従うことなく、一致団結して是を負い出す
こと…」と命じた。代官を命じられているが頼経
は公家なので是を地元の武士である緒方三郎維義
に命じて対応させることにした。命じられた維義
は普通の武士ではない。

此処からは緒方三郎維義の生い立ちに関わる物
語なのだが、内容が「古事記」に出てくる神話に

似ているのが気になる。我が国の古代神話は九州
が本場であろうから、形を変えた話が伝わってい
ても不思議では無いけれども、考えように依つて
は緒方三郎維義こそ古事記が伝える大和王朝の正
統：と言われても違うとは言えない。

緒方三郎維義と言う武士は「恐ろしいもの」の
末裔である。その昔、豊後国の辺鄙な山里に一人
の女性が居た。平家物語には「或る人の娘」とし
か書いてないが、源平盛衰記では「花御本（はなの
おもと）」と名付けている。従業員は居たらしいのだ
が母親と二人暮らしで夫も無かつた。ところが何
時の間にか母親が知らぬうちに夜ごとに通う男が
有り、逢瀬を重ねて身籠つた。母親が怪しんで「そ
なたの許に通う男は何者ぞ！」と問い質したけれ
ども娘は無責任に「来るを知るが、帰るを知らず、
何れの者かも知らず…」と答えた。名前ぐらい聞
いておけば良いのにも思うが…。

母親は戸籍調べが出来ないので、娘に針と緒環
を渡し「男が帰ろうとする時に印（しるし）を付けて
行方を探れ…」と教えた。娘は母親の指示に従い、
朝帰りする男の水色の衣装に糸付きの針を刺して
おいた。その糸の端は緒環に巻かれており其の伸
びる方向を辿って行くと豊後、日向両国の境に在
る「姥岳（うばだけ）」山麓の大きな岩屋に達してい
た。娘が岩屋の入口で耳を澄ますと中から呻き（う
めき）声がする。娘が心配して「私は貴方の後を
つけて此処に来てしまいました。中に入っても良
いでしょうか？」と訊ねると「私は人間の姿をし
て居ないので、見れば驚くであろうから見ずに帰
ったほうが良い。腹の子は男児であり将来は武芸
で九州地方随一の武士になる…」と答えた。娘は
気丈にも「夫婦の契りを結んだからには貴方がど
の様な姿でも驚きません。是非、面会がしたいの

で出て来て下さい」と頼んだ。

其処まで言われると相手も断り難くなつて「そ
れでは…」と出て来たのがトグロを巻いた直径だ
けでも二メートルぐらい、延びれば四十メートル
以上もある大蛇で、全身を揺らしながら這い出て
来たのである。問題は大蛇が人間の姿をしていた
時に娘が付けた緒環で、娘は若者の衣装の襟に差
したつもりなのだが、それが大蛇の喉笛（のどぶえ）
に刺さっていたのである。

是を見た娘は言葉も無く驚いたのだが、従つて
来た家来たちは第三者であるから覚悟が出来てい
ない。恐怖で腰を抜かし叫んだり転げたりしなが
ら逃げ出してしまった。娘も相手が重傷を負つた
大蛇と分かつた以上、救急車を呼ぶことも出来ず
別れて帰ってくる他は無くやがて男児を生んだ。

其の子は太大夫（だいたゆう）と言う母方の祖父が
育てたが、十歳にもならぬ中に身体が大人に成長
したので元服させ、名を祖父に因んで大太と名付
けた。夏も冬も手足には「あかがり」あかがれ」
が出来ていたので「あかがり大太」と呼ばれてい
た。後で判つたことなのだが負傷した大蛇は実は
日向国に祭祀され崇拝されている高千穂明神の御
神体であつた。そうなると「あかがり大太」は大
蛇を経由してはいるが日本国に「天孫降臨」した
天照大神の直系子孫ということになり、平家は元
より天皇家でさえも及ばない血筋になる。

深く追求すると日本国の根幹を揺るがす問題に
なるので放つておいて、あかがり大太の五代の子
孫になる緒方の三郎は国司から「平家を九州から
追い出すように」命じられたので是を院宣（いんぜ
ん＝法皇又は上皇の命令）と称して九州一円の武士たち
に触れ回ったから、多くの地方武士が緒方三郎維
義に従つて平家の敵になつたのである。

太宰府落(ださいふおち)のこと

都から遠く離れた九州の地に來た平家一門は、此処ならば落ち付けると判断して取り敢えず安德天皇の為に内裏を造営することを思い付いたのであるが、その矢先に緒方維義の謀叛を知りすつかり慌ててしまった。平大納言時忠が「緒方維義は小松殿・金重盛の家臣であつたから、此処は小松殿の若君たちを向かわせて説得させる他は無いでしょう」と言つたので、一同が賛成して小松新三位中将資盛に五百余騎が付けられて豊後国に向かい様々に説得したけれども、さすがに大蛇の子孫だけあつて容易に言うことを聞かない。

それどころか「私は今、此処で資盛卿を捕らえることも出来るが、大事・金家追討の中に小事無しと言ふから、手出しはしません。また貴方がたも(是だけの軍勢では)何も出来ないでしょう。どうか、早く太宰府にお歸りになつて平家一門に合流し運命に従つてください」と言つて追い返してしまつた。

その後で緒方維義は、阿蘇地方に住む次男の野尻二郎維村を使者に立てて太宰府へ申し入れた。

「緒方家にとつて平家は代々の恩がある主筋なので本来は兜を脱ぎ、弓を外して降伏すべきところですが、後白河法皇からの命令で九州から平家を追い出せと言われました。法皇の命令には背けませんので、どうか速やかに九州を出て頂くようにお願いを申しあげます」

是に対して平家を代表するように、大納言時忠が緋色の絞り染めをした直垂に葛布の袴と立烏帽子で(つまり半分は武装のような公家の衣装で)維村を迎え

「我が君(平家が擁する安德天皇)は天孫四十九代の正統を継ぐ帝(みかど)であり、天照大神も正八幡神も我が君を御護り下さる。

とりわけ、今は亡き太政大臣清盛入道殿は保元平治二度の乱を鎮め、鎮西(九州一帯)の武士たちを官軍に加えたのである。今、東国・北国の者どもが頼朝や義仲に騙されて、味方に付けば国を与えよう、庄園を授けようなどと言う言葉を真に受けて源氏に味方している。それを真に受けて、鼻豊後(豊後国司の藤原頼實は鼻が大きかったので悪口に呼ばれた)の命令に従おうとするのは間違つている」と二郎維村に説教をした。

維村は、取り敢えず戻つて父親に報告をしたので折角の好意を無視された緒方維義は「何と言うことだ。昔は昔、今は今、平家が其の様な態度ならば速やかに追い出してしまへ」と軍勢を集め始めた。その情報が平家方に伝わつたので平家の武士である源大夫判官季貞(清和源氏でも平家に従つていた)や摂津判官守澄らが今後の味方に悪影響が有る…として三千余騎で押し掛けてきた。

戦場となつたのは筑後国高野本庄(福岡県浮羽地方)であるが、一昼夜戦つて平家方は力負けして退いた。更に勢いに乗つた緒方維義の軍勢が三万余騎で攻めて来るというので慌てた平家は取るも取り敢えず太宰府から落ちて行く他は無かつた。

あれ程頼みにしていた太宰府天満宮の神域を心細くも立ち離れて行くのに天皇の乗る立派な輿を担ぐ者も居らず、飾りの無い輿に揺られて行く天皇に従う国母(安德天皇生母・清盛の娘)を始めとする女官たちは徒歩で袴の裾を取り、大臣(宗盛)以下の公家たちも転び易い衣服を気にしながらの歩行であつた。天智天皇時代に築かれた水城(みずき)の関を過ぎて、素足のまま、我れ先にと箱崎の湊へ向

かつて落ちて行つた。

折から降り出した雨は激しく、吹く風は砂を巻き上げる勢いであり、逃げ行く者の涙と雨とが混じつて前方が見え無い。途中、博多の住吉神社、管崎八幡宮、香椎の宮、宗像神社(いずれも神話時代の神を祀る)を伏し拝み只々、安德天皇が京都に戻れることを祈願した。垂見峠(たるみとおげ)などの難所を越えて鵜浜(うずらはま)内浦浜の果てしない砂浜を歩み続けたのだが、何しろ土や石の上を歩いたことが無い連中であるから馴れぬ歩行に足は血が滲み、更衣室が無くて着衣も着た仮なので紅の袴は色が褪せ、白衣が汚れて紅色になつた。

其の昔、唐の国で玄奘(げんじょう)三蔵法師が遠くインドに旅立ち砂漠地帯やパミール高原などで苦勞をされた苦しみも、此の苦勞に過ぎることは無かつたであろう。法師の苦難は仏道修行のためであり、自分にも他人にも何らかの功德を齎したであろうけれども、是(金家の場合)は怨敵に追われている結果なので現世に居ながら後世の苦しみも思われて悲しいばかりである――と作者は言うが、三蔵法師は砂漠地帯など未知の国を一人で旅して仏教を学び多くの經典などを持ち帰つたのであるから、その苦勞は平家の比ではない。

やがて原田大夫種直という地元の武士が二千余騎で平家の許に來ることになつた。さらに山鹿兵藤次秀遠と(やまがのひょうとうじひでと)と言う菊地一族の武士も数千騎で平家を迎えに出る予定だつた。ところが、何が原因か此の二人の武將は急に不仲になり、原田種直は來なくなつた。

山鹿一族に護られて遠賀郡の芦屋の津を過ぎた時に、平家の者たちは「芦屋は我らが都から福岡へ通う道筋で良く聞いた里の名である」と懐かしく思い、今更に哀れを催したのであるが、逃亡

中であるから荒海を越えて新羅・百濟・高麗など朝鮮半島から雲の果て、海の果てまでも逃げて行きたい。しかし強風や荒浪の立ち騒ぐ海は簡単に渡れるものではない。仕方なく北九州の山賀城に籠ったけれども、やがて其処へも敵が押し寄せて来るといので小舟で対岸の豊前国柳が浦に渡り其処に内裏を建造しようとした。

しかし宮殿を造るほどの土地も無し、先立つ国家予算は使えず、平家の財産も無い。更に長門の国から海峡を越えて源氏が攻めて来ると言うので地元の海女さんたちが使う小舟や漁船などを盗んで一同が其れに分乗し取り敢えず海に浮かんだ。

小松殿こと今は亡き重盛の三男で其の時に左近衛の中将であった平清経は、何事も思ひ詰める性格の人だったので「都は源氏に落とされ、鎮西（九州）は緒方維義に追い出されて、今や平家は網に掛かった魚も同然である。何処へ行けば逃げ切ることが出来るのか……この様な情けない状態ならば生きていても希望が持てない！」と月の夜に心を澄まして船の屋形（屋根）に登り、愛用の横笛を吹きながら覚えていた漢詩を朗詠していた。やがて其れがお経の文句に変わり清経は念仏を唱えながら海に飛び込んだ。源平盛衰記では都を離れる時に最愛の女房を同道させる事が叶わず、形見に髪の毛を切って置いてきた、とあるから早い中から死を覚悟していたのであろう。平家の男女は泣き悲しんだけれども、どうにもならない。

平家の一行が向かう長門国は、新中納言知盛の領地であったから本来ならば何処よりも安全なのだが既に源氏に味方する者が増えている。その時の「目代（もくだい＝領地の私的な管理者）」は紀伊刑部大夫道資と言う者であった。主君たちが小船に乗って漂流している、と聞いて、大型の船を百余艘ほ

ど準備して献上した（凄）。是に乗り換えた平家は長門国を諦めて四国に渡った。

一般的な概念では源氏に追われる平家は先ず四国に居て其処から長門の壇ノ浦で滅びるのだが、是までに書いた内容（平家物語）だと一旦は九州に逃れ、それから四国に渡り勢力を回復して本格的な源平の合戦になる。平家物語は嘘をつかないであろうから其れに従って頭の中を整理すると、当時の勢力範囲は最初に平家を苛めたのが木曾義仲であり、短期間だとは思いますが信濃から北陸、近畿、中国地方の一部を抑えた。平家は地元武士の裏切りに遭いながら九州、中国地方の一部と四国を地盤に残しており、源頼朝は関東・甲斐・東海と徐々に勢力を広げ、東北地方は源義経を保護していた奥州藤原氏の王国が繁栄していた——ということになるのであろうか。

話を戻すと、四国に疎開した平家は少し平和を取り戻したようだが四国中の武士を総動員して讃岐の屋島に形式だけの内裏や御所を造らせた。工事期間中は天皇が住むような家が無かったため仕方無く船の上を仮の御所とした。どの様な家でも船の暮らしよりは良いと思うのだが……当然のことに元大臣の宗盛以下、自分で偉いと思っていた連中が漁師の住家に日を送り、粗末な寝床に夜を過ごすことになった。龍頭鰐首（りゅうとうげきしゅ＝龍の頭と想像上の羽の白い鳥の飾りを船首に付けた船、皇帝や天皇の御座船の象徴的表現……実際には普通の船であったと思う）を海に浮かべた浪の上の仮御所は静かな時が無かった——当たり前。

四国での暮らしは、月影を映した潮流に深い愁いを感じ、平家の行く末に霜を受けた蘆の葉のような脆（もろ）さを覚えて心細く、浅瀬に鳴く千鳥の声は明け方に騒がしくて安眠を妨げる。付近の

海を行く船の気配に落ち着かず、遠方の松原に白鷺が舞うのを見ては源氏が白旗を揚げた攻め寄せたかと驚くような日々に加えて、吹き渡る海風はお肌によく無いから女性たちの美貌にも影響してくる。贅沢の言える立場では無いが、誰もが碧い海を眺めては捨てて来た都での暮らしを無駄に懐かしんで涙を流すだけである。

特に都で白塗りの厚化粧をしていた女官たちも化粧品不足で黛（まゆぞろ）だけ濃くしていた。それが涙で落ちて顔が縞（しま）リスのようになり、誰だか見分けがつかない。逃亡生活であるから贅沢は言えないけれども気の毒ではある。やがて源氏軍に攻め込まれた平家は其処にも居られなくなる。

次の章段では、源頼朝が出てくるから「平家物語」が次第に「源氏物語？」に変わってゆく。

お知らせ

ふるさと風の会では、読者の皆様からの投稿をお待ちしております。原稿用紙5枚以内にまとめ事務局までお送りください。原稿には必ず氏名・住所・電話番号と筆名をご希望の方は筆名を書いてお送りください。本名・連絡先住所のない方の掲載はお断りさせていただきます。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会 12 周年記念祭・第二弾

ふるさと風劇団「ことば座」公演

7月16日(月)ふれあいの里石岡・ひまわりの館
常世の国の恋物語百:第三十八話

Ryu(龍)

果てしない悠久の時を生き続ける龍。しかしその悠久とは人間の尺度としての時のこと。龍の一年は、人間の千年。龍の寿命はきっかり六十年。人間の六万年。現代人の祖先「新人」が誕生したのはおよそ四万年前。今の人間の歴史は龍の一生よりも短いのだ。古老は言う。「龍には説明の言葉はもう存在しない。人間の知る今の龍は、安静を感じ合える揺らぎの波動としての言葉しかない」と。

常世の国の恋物語百に、龍の登場する話は今回で五話目。あなたは龍を信じますか。私は龍の存在を信じます。

企画・製作：ふるさと風の会

脚本・演出・朗読：白井啓治 手話舞：小林幸枝 舞台背景画：兼平智恵子 舞台装備：小林一男



会 場：ふれあいの里石岡・ひまわりの館

開 場：午後2時 開演：午後2時30分

入場料：大人2,000円、中学・高校生1,000円、小学生無料

ふるさと風の会 茨城県石岡市国府4-3-32 TEL080-3125-1307(白井)